日本における中国画題綜覧（七）

A Compendium of Chinese Painting Themes in Japan (7)

張　小鋼
Zhang　Xiaogang

き行（一）

きえいかい　耆英会

宋代の洛陽の耆英会は、文潞公のことである文彦博（1006～1097）が香山（白楽天）の九老会に憧れて作られたものである。つまり洛中の徳行のある年寄りを集めた会である。妙覚寺の境内で屋敷を建てて「耆英堂」と名付けた。閩（福建省）の人鄭奐に皆の似顔絵を描かせ、飾った。全部十三人で、文彦博、富弼、席汝言、王尚恭、趙丙、劉況、馮行已、楚建中、王謹言、張問、張壽、王拱辰、司馬光という。

【出典】

彦博雖窮貴極富，而平居接物謙下，尊德樂善，如恐不及。其在洛也，洛人邵雍、程顥兄弟皆以道自重，賓接之如布衣交。與富弼、司馬光等十三人，用白居易九老會故事，置酒賦詩想樂，序齒不序官，為堂，繪像其中，謂之洛陽耆英會，好事者莫不慕之。（元・脫脫等撰『宋史』巻三一三）

耆英會序。昔白樂天在洛與高年者八人遊時，人慕之。圖傳於世。宋興，洛中諸公繼而爲之者再矣。皆圖形普明僧舍，樂天之故第也。元豐中潞國文公留守西都，韓國富公致政在里第，皆自逸於洛者。潞國謂韓國公曰，凡所爲慕於樂天者，以其志趣高逸也。奚必文與地之襲焉。一日，悉集士大夫老而賢者於韓公之第，買酒相樂。賓主凡十有二人。圖形妙覺僧舍。時人謂之洛陽耆英會。（宋・謝維新撰『古今合璧事類備要』前集巻五十八）

洛社耆英。文潞公慕香山九老，乃集洛中年德高者爲耆英會。就資聖院建大廈。曰耆英堂。命閩人鄭奐畫像其中，共十二人。文彦博、富弼、席汝言、王尚恭、趙丙、劉況、馮行已、楚建中、王謹言、張問、張燾、王拱辰。獨司馬光年未七十，潞公用香山狄兼謨故事，請溫公入社。（明・張岱撰『夜航船』巻三）

ぎかけつそう　魏顆結草

魏顆は魏武子の子である。魏武子に一人の妾がいるが、子どもを授かることが出来ない。そこで武子が心配になり、顆に「将来必ず結婚させて出してください」と言った。武子が病気になり、顆に「彼女を私と一緒に埋葬してください」と頼んだ。ところが、武子が病死した後、顆は父親が元気の時の言葉に従い、彼女を出した。後に顆は秦の軍隊と戦い、ある老人が草の縄で秦の将軍杜回の馬を倒したことで、回を捕まえた。そのため、顆が秦軍を負かしたのである。夜顆が老人の夢を見た。老人は自分が武子の妾の父親で、恩返しのために杜回を倒したと説明した。（『左伝』宣公一五年）

【出典】

左傳曰，魏顆，武子之子。初，武子有嬖妾，無子，武子疾，命顆曰，必嫁是。疾病則曰，必以為殉。卽卒，顆嫁之，曰，疾病則亂，吾從其治也。及敗秦師于輔氏，獲杜回，秦之力人也。顆見老人結草以亢杜回。回躓而顛，故獲之。夜夢之曰，予而所嫁婦人之父也。爾用先人之治命，余是以報。（唐・李瀚撰、宋・徐子光注『蒙求集注』巻上）

【作例】

「魏顆結草」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』初編巻九、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

きげんりょうしゅう　季彦領袖

晉の裴秀（224～271）は、字が季彦といい、河東（山西省）の聞喜の人である。幼い頃、秀は勉強が好きで、八歳にして文章を書ける。叔父の徽を訪ねた人は帰りにわざわざ秀を訪ねる。秀の母親は妾のため、正妻はよく彼女に客に食事を運ばせた。客は彼女を見て皆立ち上がり礼をした。彼女は「きっと自分の子どものためだろう」と言った。時の世人は「若手の領袖に裴秀がいる」（後進領袖有裴秀）と称賛した。尚書令、右光禄大夫などの官職を歴任した。秀はかつて『禹貢地域図』一八篇を作り、献上した。泰始七年（271）に亡くなり、四十八歳であった。（唐・房玄齢等撰『晉書』巻三五）

【出典】

晉裴秀，字季彦，河東聞喜人。少好學，有風操，八歳能屬文。叔父徽有盛名，賓客甚衆。秀時年十歳，有詣徽者，出則過秀，秀母賤，嫡母宣氏不之禮。嘗使進饌于客，見者皆為之起。母曰，微賤如此，當應為小兒故也。宣氏知，遂止。時人為之語曰，後進領袖有裴秀。武帝時為司空。秀儒學洽聞，留心政事，以職在地官，作禹貢地域圖進之，藏於秘府。（唐・李瀚撰、宋・徐子光注『蒙求集注』巻上）

【作例】

「季彦領袖」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』初編巻七、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

きぎょ　帰漁

【作例】

「帰漁」（老蓮先生著『畫圖酔芙蓉』中巻、享和三年［1803］序、文化六年［1809］叙刊本）

ききょらい　帰去来

晉の詩人陶淵明の『帰去来兮辞』を図解する挿絵である。

【出典】

歸去來兮。田園將蕪。胡不歸。既自以心爲形役。奚惆悵而獨悲。悟已往之不諫。知來者之可追。實迷途其未遠。覺今是而昨非。舟遙遙以輕颺。風飄飄而吹衣。問征夫以前路。恨晨光之熹微。乃瞻衡宇。載欣載奔。僮僕歡迎。稚子候門。三徑就荒。松菊猶存。攜幼入室。有酒盈罇。引壺觴以自酌。眄庭柯以怡顔。倚南窗以寄傲。審容膝之易安。園日涉以成趣。門雖設而常關。策扶老以流憩。時矯首而遐觀。雲無心而出岫。鳥倦飛而知還。景翳翳以將入。撫孤松而盤桓。歸去來兮。請息交以絶遊。世與我而相違。復駕言兮焉求。悅親戚之情話。樂琴書以消憂。農人告余以春及。將有事於西疇。或命巾車。或棹孤舟。既窈窕以尋壑。亦崎嶇而經丘。木欣欣以向榮。泉涓涓而始流。喜萬物之得時。感吾生之行休。已矣乎。寓形宇內復幾時。曷不委心任去留。胡爲乎。遑遑兮欲何之。富貴非吾願。帝鄉不可期。懷良辰以孤往。或植杖而耘耔。登東皐以舒嘯。臨清流而賦詩。聊乘化以歸盡。樂夫天命復奚疑。（『陶淵明集』巻五）

【作例】

↓「陶淵明、彭澤に令たりし日、同僚と日々飲宴し世事に關らざる圖」［其一］、「淵明、彭澤令を遁れて家に帰る、児孫喜び迎る圖」［其二］、「淵明、後堂に安居し琴酒逸樂乃圖」［其三］（有臺藤應著、旭輝齋畫『畫本古文眞寶後集』初編巻一、嘉永三年［1850］刊本）

ぎきょこく　義渠國

義渠国は秦国の西にある。そこの人の親族が亡くなると、薪を集めて火葬するという。義渠は後に秦に滅ぼされた。

【出典】

秦之西，有義渠之國者。其親戚死，聚柴薪而焚之，熏上謂之登遐。（『墨子』巻六・節葬、諸子集成四）

【作例】

「義渠國」（明・王圻、王思義『三才圖會』人物十三巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「義渠國」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻四、享保四年［1719］刊本）

きく　菊

菊はまた「女節」、「女華」ともいう。種類が多くある。

【出典】

唐本草菊花一名女節，一名女華，劉蒙菊譜三十五品，又三十二品。范石湖菊譜七十二種。今不止一種。甘菊莖紫氣香、味甘，花深黄，單葉，蒂有粥膜衣者爲眞。取花作糕幷鹹烹飲佳。又有鴛鴦菊、五月菊、六月菊。陸龜蒙有杞菊賦。曾端伯以爲佳友。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』草木十二巻）

【作例】

「菊」（明・王圻、王思義『三才圖會』草木十二巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「菊」（中村惕斎『訓蒙圖會』巻二十、寛文六年［1666］刊本）

「菊」（『繪本初心柱立』三、正徳五年［1715］刊本、寶暦一一年［1761］再刊本）

「菊」［陳憲章筆、居其斎筆］（法眼春卜一翁集『畫史會要』巻二、寛延四年［1751］刊本）

「菊」（玉翠斎藤原義包圖『畫圖撰要』巻中、明和三年［1766］刊本）

「菊」［扇面］（尾形光琳『光琳百圖』下、文化一二年［1815］跋刊本）

「秋の菊」（葛飾爲斎繪『萬物圖解爲斎畫式』二帙、元治一年［1864］序刊本）

「菊」（文鳳山人［文鳳駿聲］『文鳳畫譜』三編、文化八年［1811］刊本）

「喜久」（『後素畫譜』天保三年？［壬辰閏月］刊本）

「菊」（鮮斎永濯繪『萬物雛形畫譜』初編、明治一二年［1879］刊本）

「きく」（『職巧雛型錦袋畫叢』）

「菊」（『草筆骨法麗畫苑』巻下）

「菊」（『北渓漫畫初編』）

↓「菊花」

きくじどう　菊慈童

菊慈童の出所は不詳である。彭祖の話と菊の話はあるが、日本で二つの話が合成されたと推測される。また、菊についても、二つの話がある。その一つは南陽酈県（河南省南陽）の山中に甘谷があり、その渓流の水を飲むと長寿になるという。もう一つは荊州（湖北省荊州）に菊潭があり、その水を飲むと長寿になるという。なお、「慈童」は

仏典にある「慈童女」によるものと推測される。

【出典】

南陽酈縣山中有甘谷水，谷水所以甘者，谷上左右皆生甘菊，菊花墮其中，歷世彌久，故水味爲變。其臨此谷中居民，皆不穿井，悉食甘谷水，食者無不老壽，高者百四五十歲，下者不失八九十，無夭年人，得此菊力也。故司空王暢、太尉劉寬、太傅袁隗，皆爲南陽太守，每到官，常使酈縣月送甘谷水四十斛以爲飲食。此諸公多患風痺及眩冒，皆得愈，但不能大得其益，如甘谷上居民，生小便飲食此水者耳。又菊花與薏花相似，直以甘苦別之耳，菊甘而薏苦，諺言所謂苦如薏也。今所在有眞菊，但爲少耳，率多生於水側，緱氏山與酈縣最多，仙方所謂日精、更生、周盈皆一菊而根、莖、花、實異名，其說甚美，而近來服之者略無效，正由不得眞菊也。夫甘谷水得菊之氣味，亦何足言。而其上居民，皆以延年，況將復好藥，安得無益乎？（晉・葛洪撰『抱朴子』內篇卷十一）

或人問曰，彭祖八百，安期三千，斯壽之過人矣。若果有不死之道，彼何不遂仙乎。豈非稟命受氣，自有脩短，而彼偶得其多，理不可延，故不免於彫隕哉。抱朴子答曰，按彭祖經云，其自帝嚳佐堯，歷夏至殷爲大夫，殷王遣綵女從受房中之術，行之有效，欲殺彭祖，以絕其道。彭祖覺焉而逃去，去時年七八百餘，非爲死也。黃石公記云，彭祖去後七十餘年，門人於流沙之西見之，非死明矣。又彭祖之弟子，青衣烏公、黑穴公、秀眉公、白兔公子、離婁公、太足君、高丘子、不肯來七八人，皆歷數百歲，在殷而各仙去，況彭祖何肯死哉？又劉向所記列仙傳亦言彭祖是仙人也。（晉・葛洪撰『抱朴子』內篇卷十三）

波羅奈國有長者子，名慈童女。其父早喪，錢財用盡。役力賣薪，日得兩錢，奉養老母。方計轉勝，日得四錢，以供於母。遂復漸差，日得八錢，供養於母。轉爲衆人之所體信。遠近投趣，獲利轉多。日十六錢，奉給於母。衆人見其聰明福德，而勸之言，汝父在時，常入海採寶，汝今何爲不入海也。聞是語已，而白母言，我父在時。恆作何業。母言，汝父在時，入海取寶。便白母言，我父若當入海採寶，我今何故不復入海。母見其子慈仁孝順，謂不能去，戲語之言，汝亦可去。得母此語，謂呼已定，便計伴侶，欲入海去。（「雜寶藏經・慈童女緣」巻一，『大正新脩大藏經』第四巻）

【作例】

「菊慈童」（林守篤編述『畫筌』巻四、正德二年［1712］序、享保六年［1721］刊本）

「菊慈童」（雪蕉斎『畫本拾葉』巻上、寛延四年［1751］序、寶暦一年［1751］刊本）

「菊慈童」（鍬形蕙斎『人物略畫式』、文化十年［1813］刊本）

「菊慈童」（滝澤清畫『潛龍畫譜』人物之部、明治十五年［1882］刊本）

「菊慈童画を描く」（竹原信繁『繪賛常農山』、寛政四年［1792］序、寛政五年［1793］刊本）

↓「慈童」

きくだんじどう　菊潭児童

↓「菊慈童」

【作例】

「菊慈児童」（橘守国『繪本鶯宿梅』巻三、元文五年［1740］刊本）

きくばな　菊花

↓「菊」

【作例】

「菊花」（鮮斎永濯繪『萬物雛形畫譜』三編、明治一二年［1879］刊本）

ぎげんちゅう　魏元忠

魏元忠（?～707）、本名は真宰といい、宋州宋城（河南省商丘）の人である。初めは太学生であったが、唐の高宗の頃、上京して秘書省正字に任用された。文明元年（684）に殿中侍御史になり、聖暦二年（699）に鳳閣侍郎、鳳閣鸞臺平章事になった。則天武后が崩御した後、魏元忠が中書令になり、斉国公に封ぜられた。景龍元年（707）務川尉に左遷され、七十歳余り亡くなった。諡は貞という。定陵に陪葬された。

【出典】

魏元忠，宋州宋城人也。本名眞宰，以避則天母號改焉。初，爲太學生，志氣倜儻，不以舉薦爲意，累年不調。時有左史盩厔人江融，撰九州設險圖，備載古今用兵成敗之事，元忠就傳其術。儀鳳中，吐蕃頻犯塞，元忠赴洛陽上封事，言命將用兵之工拙，［中略］帝甚嘆異之，授祕書省正字，令直中書省，仗內供奉。尋除監察御史。文明年，遷殿中御史。其年，徐敬業據揚州作亂，左玉鈐衛大將軍李孝逸督軍討之，則天詔元忠監其軍事。［中略］固請決戰，乃平敬業。元忠以功擢司刑正，稍遷洛陽令。尋陷周興獄，詣市將刑，則天以元忠有討平敬業功，特免死配流貴州。［中略］聖曆元年，召授侍御史，擢拜御史中丞。又爲來俊臣、侯思止所陷，再被流于嶺表。復還，授御史中丞。元思前後三次被流，於時人多稱其無罪。則天嘗謂曰，卿累負謗鑠，何也。對曰，臣猶鹿也，羅織之徒，有如獵者，苟須臣肉作羹耳。此輩殺臣以求達，臣復何辜。聖曆二年，擢拜鳳閣侍郎，同鳳閣鸞臺平章事，檢校并州長史。未幾，加銀青光祿大夫，遷左肅政臺御史大夫，兼檢校洛州長史，政號清嚴。［中略］中宗卽位，其日驛召元忠，授衛尉卿，同中書門下三品。旬日，又遷兵部尚書，知政事如故。尋進拜侍中，兼檢校兵部尚書。時則天崩，中宗居諒闇，多不視事，軍國大政，獨委元忠者數日。未幾，遷中書令，加授光祿大夫，累封齊國公，監修國史。（後晉・劉昫等撰『舊唐書』巻九十二，列傳第四十二）

【作例】

「魏元忠」（文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年［1803］刊本）
「魏元忠」（文鳳駿聲『文鳳麄畫』、享和三年［1803］刊本）

きこう　木公

木公、名前は倪、字は君明、号は東王公という。木公は天下の男子が仙人になることを司る。おおよそ仙人になる人は先に木公に、後に西王母に挨拶し、その儀式が終わった後、はじめて昇天することが許可される。漢のはじめ頃、張良（子房）だけが挨拶に行った。彼は東王公の玉童であるという。

【出典】

木公諱倪，字君明。天下未有民物時，鍾化而生於碧海之上，蒼靈之墟。道性凝寂，湛體無爲。將贊迪玄功，育化萬物，主陽和之氣，理於東方。亦號東王公。凡上天下地，男子登仙得道者，悉所掌焉。嘗以丁卯日登臺觀望，轉劫學道得仙之品。品有九。一曰九天眞皇，二曰三天眞皇，三曰太上眞人，四曰飛天眞人，五曰靈仙，六曰眞人，七曰靈人，八曰飛仙，九曰仙人。凡品仙昇天之日，先拜木公，後謁金母。受事既畢，方得昇九天，入三清，禮太上而觀元始。漢初有羣兒戲謠於道曰，著青裙，上天門，揖金母，拜木公。時人皆莫之知。唯子房往拜焉。乃語人曰，此東王公玉童也。（明・王世貞撰『有象列仙全傳』巻一）

【作例】

「木公」（明・王世貞『列仙全傳』巻一、萬暦二八年［1600］刊本）
「木公」（寂照主人月僊寫並題『列仙圖賛』一、天明四年［1784］刊本）

きこうこく　奇肱國

奇肱國は一臂国の北にある。そこの人は一本の臂と三つの目がある。

【出典】

奇肱之國，在其［一臂國］北，其人一臂三目，有陰有陽，乘文馬。有鳥焉，兩頭，赤黄色，在其傍。（晉・郭璞注『山海經』巻七・海外西經）

奇肱國能爲飛車，從風遠行。湯時以車乘西風至豫州，湯破其車。後十年東風至，乃使乘車歸國。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十四巻）

【作例】

「奇肱國」（明・王圻、王思義『三才圖會』人物十四巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「奇肱國」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻五、享保四年［1719］刊本）

きこうせん　龜甲仙

↓「盧敖」

【作例】

「龜甲仙」［治部季頼筆］（法眼春卜一翁集『畫史會要』巻三、寛延四年［1751］刊本）

きこうせんにん　龜甲仙人

↓「盧敖」

【作例】

「龜甲仙人」（大岡道信『押繪手鑑』巻上、元文1年［1736］刊本）

きこくし　鬼谷子

鬼谷先生、姓は王、名は利、または詡という。晉の平公の頃の人である。鬼谷に隠居しているため、それを号としたのである。かつて雲夢山に入り、薬草を採り、道を得て、不老不死の身となった。先生も清渓山中に住んでおり、蘇秦、張儀は共に先生に縦横学を教わった。蘇、張二人は皆諸国で自分の政治才能を発揮したいので、互いに猜忌、欺瞞をしあう。先生は大変心を痛め、何回も蘇、張二人に泣いた。結局悟らせない。蘇、張は三年間学んだ。別れる際、先生は二人に文章を贈った。その内容は、二人は功名が顕著であるが、春と秋の季節が変るので、長く続かない云々であった。さらに一隻の靴を与えた。靴が犬に化け、二人をその日に秦の国まで案内した。先生は修行に集中し、数百歳まで生きていたという。秦の始皇帝の頃、大宛の国中に多くの死者を出した。屍が荒野のあちこちにある。鳥が草を銜えて死人の顔を覆った。すると、死人が生き返ったという。役所がそのことを始皇帝に報告した。始皇帝が使者を派遣し、その草を持って先生に確認してもらった。先生は「大海の中には十の州があり、祖州、瀛州、玄州、炎州、長州、元州、流州、光生州、鳳麟州、聚窟州である。この草は祖州の不死草である。瓊田に生えているので、「養神芝」ともいう。その葉っぱは菰と似ている。叢生ではない。一本で千人の命を助けることができる。」と説明した。

【出典】

鬼谷先生，晉平公時人。隱居鬼谷。因爲其號。先生姓王名利。亦居清溪山中。蘇秦、張儀從之學縱横之術，二子欲馳騖諸侯之國，以智詐相傾奪，不可化以至道。夫至道玄微，非下才得造次而傳。先生痛其道廢絶，數對蘇、張涕泣。然終不能寤。蘇、張學成別去。先生與一隻履。化爲犬。北引二子卽日到秦矣。先生凝神守一，朴而不露，

在人間數百歳。後不知所之。秦皇時，大宛中多枉死者横道。有鳥御草以覆死人面，遂活。有司上聞，始皇遣使齎草以問先生。先生曰，巨海之中有十洲。曰祖洲、瀛洲、玄洲、炎洲、長洲、元洲、流洲、光生洲、鳳麟洲、聚窟洲。此草是祖州不死草也。生在瓊田中。亦名養神芝。其葉似菰。不叢生。一株可活千人耳。出仙傳拾遺（宋・李昉等撰『太平廣記』巻四）

鬼谷子，春秋晉平公時人。姓王，名詡。嘗入雲夢山採藥得道，顔如少童。居青溪之鬼谷。蘇秦、張儀嘗問道，三年辭去。子遺之書曰，二足下功名赫赫，但春華至秋，不得久茂。今二子好朝露之榮，忽長久之功，輕喬松之永末延，貴一旦之浮爵。夫女愛不極席，男歡不畢輪，痛哉。鬼谷處人間數百歳。後不知所之。有陰符 鬼谷子二書行于世。（明・王世貞撰『有象列仙全傳』巻二）

【作例】

「鬼谷子」（明・洪應明『仙佛奇踪』巻一、萬暦三〇年［1602］刊本）

「鬼谷子」（明・王圻、王思義『三才圖會』人物十巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「鬼谷子」（寂照主人月僊寫並題『列仙圖賛』二、天明四年［1784］刊本）

きさつ　季札

呉王の壽夢には四人の子供がいる。長男は諸樊、二男は餘祭、三男は餘昧、四男は季札という。季札は賢人であるため、壽夢は太子にしたいが、季札は辞退した。すると長男の諸樊を太子にしたのである。諸樊が亡くなった際、兄弟順番に王になるべきだと主張し、帝位を次男餘祭に譲った。季札に延陵の土地を与えた。故に「延陵季子」を号とする。季札が初めて使者として外国に行った際、徐君を訪ねた。徐君は季札の剣が好きだが、ついに口に出さなかった。季札は献上したいが、他の国に行かなければならないので、黙っていた。帰りに、徐君が既に亡くなった。季札は徐君の墓参りに行って、剣を墓前の木に掛けて帰国の途に着いた。部下は「徐君が既に亡くなったので、誰にあげるか。」と聞き、季札は「私は前からすでに心で献上したいと思った。人が死んだからといって、裏切ることができない。」と言った。

【出典】

二十五年，王壽夢卒。壽夢有子四人，長曰諸樊，次曰餘祭，次曰餘昧，次曰季札。季札賢，而壽夢欲立之，季札讓不可，於是乃立長子諸樊，攝行事當國。［中略］十三年，王諸樊卒。有命授弟餘祭，欲傳以次，必致國於季札而止，以稱先王壽夢之意，且嘉季札之義，兄弟皆欲致國，令以漸至焉。季札封於延陵，故號曰延陵季子。［中略］四年，吳使季札聘於魯，請觀周樂。爲歌周南、召南。曰，美哉，始基之矣，猶未也。然勤而不怨。歌邶、鄘、衛。曰，美哉，淵乎，憂而不困者也。吾聞衛康叔、武公之德如是，是其衛風乎。歌王。曰，美哉，思而不懼，其周之東乎。歌鄭。曰，其細已甚，民不堪也，是其先亡乎。歌齊。曰，美哉，泱泱乎大風也哉。表東海者，其太公乎。國未可量也。歌豳。曰，美哉，蕩蕩乎，樂而不淫，其周公之東乎。歌秦。曰，此之謂夏聲。夫能夏則大，大之至也，其周之舊乎。歌魏。曰，美哉，渢渢乎，大而寛，儉而易，行以德輔，此則盟主也。歌唐。曰，思深哉，其有陶唐氏之遺風乎。不然，何憂之遠也。非令德之後，誰能若是。歌陳。曰，國無主，其能久乎。自鄶以下，無譏焉。歌小雅，曰，美哉，思而不貳，怨而不言，其周德之衰乎。猶有先王之遺民也。歌大雅。曰，廣哉，熙熙乎，曲而有直體，其文王之德乎。歌頌。曰，至哉矣，直而不倨，曲而不詘，近而不偪，遠而不攜，遷而不淫，復而不厭，哀而不愁，樂而不荒，用而不匱，廣而不宣，施而不費，取而不貪，處而不底，行而不流。五聲和，八風平，節有度，守有序，盛德之所同也。見舞象箾，南籥者，曰，美哉，猶有感。見

舞大武，曰，美哉，周之盛也其若此乎。見舞韶濩者，曰，聖人之弘也，猶有慙德，聖人之難也。見舞大夏，曰，美哉，勤而不德！非禹其誰能及之。見舞招箾，曰，德至矣哉，大矣，如天之無不燾也，如地之無不載也，雖甚盛德，無以加矣。觀止矣，若有他樂，無不敢觀。［中略］季札之初使，北過徐君。徐君好季札劍，口弗敢言。季札心知之，爲使上國，未獻。還之徐，徐君已死，於是乃解其寶劍，繫之徐君冢樹而去。從者曰，徐君已死，尚誰予乎。季子曰，不然。始吾心已許之，豈以死倍吾心哉。（漢・司馬遷撰『史記』巻三十一，吳太伯世家第一）

【作例】

「延陵季子像」（明・王圻・王思義『三才圖會』人物五巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「繫劍塚樹」（元・虞韶編『新刊大字分類校正日記故事大全』巻四、嘉靖二一年［1542］序刊本）

「掛劍全信」（『勸懲故事』巻四、寛文九年［1669］和刻本）

「季札掛劍」（『圖像合璧君臣故事句解』巻二、寛文一二年［1672］跋、延寶二年［1674］和刻本）

「季札」（橘有税『繪本故事談』巻四、正徳四年［1714］刊本）

「季札」（馬場信意『分類畫本良材』巻三、正徳五年［1715］刊本）

きさん　岐山

この岐山は陝西省の岐山ではなく、漳州府（福建省漳州市）の東側の十五里にある岐山である。

【出典】

岐山在漳州府城東十五里，與鶴鳴山聯，岐三峯秀，聳龍江之上。延袤十里許，五代時，僧楚熙居此，石禪牀鑿石爲之。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理十一巻）

【作例】

「岐山」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理一一巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「岐山」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻二、享保四年［1719］刊本）

きし　箕子

箕子は殷の紂王の大臣である。箕子は紂王を諫めたが、聞き入れてもらえなかった。ある人は「離れてもよい。」と勧めたが、箕子は「人臣として諫めて、聞き入れないと去っていくのは主君の悪を人民に見せるようなことである。私は忍び難い。」といい、髪の毛をめちゃくちゃにして、狂人のふりをして奴隷になった。遂に隠れて琴を演奏しながら自分で悲しむ。その曲は「箕子操」という。周の武王が殷を滅ぼして、箕子を解放した。武王は箕子に天道のことを尋ねたが、箕子は『洪範』を以て説明した。すると、朝鮮の土地を与えて臣下にしなかった。

【出典】

箕子者，紂親戚也。紂始爲象箸，箕子歎曰，彼爲象箸，必爲玉桮。爲桮，則必思遠方珍怪之物而御之矣。輿馬宮室之漸自此始，不可振也。紂爲淫泆，箕子諫，不聽。人或曰，可以去矣。箕子曰，爲人臣諫不聽而去，是彰君之惡而自說於民，吾不忍爲也。乃被髮詳狂而爲奴。遂隱而鼓琴以自悲。故傳之曰，箕子操。［中略］武王既克殷，訪問箕子。［中略］於是武王乃封箕子於朝鮮而不臣也。（漢・司馬遷撰『史記』巻三十八，宋微子世家第八）

【作例】

「商箕子像」（清・顧沅輯『古聖賢像傳略』巻一、道光一〇年［1830］刻本）

きしこく　龜茲國

古代の亀茲国（新疆ウィグル自治区庫車）はシルクロードの文化、貿易交流の要所である。鉄など鉱産物が豊富で、駱駝や名馬の産地でもある。音楽では「亀茲楽」が有名である。

【出典】

龜茲國，王治延城，去長安七千四百八十里。戶六千九百七十，口八萬一千三百一十七，勝兵二萬一千七十六人。（中略）南與精絕、東南與且末、西南與杅彌、北與烏孫、西與姑墨接。能鑄冶，有鉛。東至都護治所烏壘城三百五十里。（漢・班固撰『漢書』巻九六下）

龜茲國，其國元日鬬牛馬駞爲戲，七日觀勝負，以占一年羊馬減耗繁滋也。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十三巻）

【作例】

「龜茲國」（明・王圻、王思義『三才圖會』人物十三巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「龜茲國」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻四、享保四年［1719］刊本）

きじ　雉

雉は遠く飛べない。高さは一丈（約3m）に過ぎないし、長さは三丈（約9m）に過ぎない。性格が頑固で、争うのが得意である。その羽は美しく、儀式によく使われる。

【出典】

雉雞類不能遠飛，崇不過丈，修不過三丈。性耿介，善鬬。雖飛不越分域，一界之內，要以一雄爲長。餘者雖衆，莫敢鳴。雌其交有時，別有倫。而其羽文明可用爲儀。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸一巻）

【作例】

「雉」（明・王圻、王思義『三才圖會』鳥獸一巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「雉」（蕙斎北尾政美『諸職畫鑑』、寛政六年［1794］刊本）

「雉子」（『後素畫譜』天保三年？［壬辰閏月］刊本）

「雉子」（葛飾戴斗畫『花鳥畫傳』二編、嘉永二年［1849］叙刊本）

「雉子」（鮮斎永濯繪『萬物雛形畫譜』三編、明治一二年［1879］刊本）

「雉子」［益信筆］（法眼春卜一翁『和漢名畫苑』五巻、寛延二年［1749］序刊本）

「雉子」（『繪本初心柱立』二、正徳五年［1715］刊本、寶暦一一年［1761］再刊本）

「雉子」（橘守国畫圖『運筆麁畫』巻中、寛延一年［1748］序、弘化一年［1844］刊本）

「雉子」（滝澤清畫『潛龍畫譜』花鳥之部、明治一二年［1879］刊本）

きじょう　耆城（域）

耆城は耆域の誤りである。耆域は天竺の人で、中華や西戎に転々した。晉武帝の頃、彼は川を渡ろうとしたが、舟の人が彼のぼろぼろの服を見て、軽視して断った。しかしながら、舟が北岸に着くと、耆域はすでに先に着いたのである。道で二頭の虎に出くわし、耆域は手で虎の頭を触り、虎は去って行った。ある日、彼は皆と別れを告げ、皆は彼を城外まで見送った。彼はゆっくり歩いたが、皆は追い付かない。この日に長安から来た人の話では向こうで耆域を見かけた。商人胡濕は同じ日に流沙で耆域を見かけた。約九千里離れているという。

【出典】

耆域，天竺人。神奇人莫能測。周流華戎。晉武帝時，至襄陽，欲

寄載過江，舟人見其衣服粗陋，輕而不載。船達北岸，而域已度。前行見兩虎，以手摩其頭，虎弭耳而逝。一日，與衆決。衆送至城外，域徐行，追者不能及。是日，有從長安來者，見域在彼。賈人胡濕，是日又逢域於流沙。計九千餘里云。（明・王世貞撰『有象列仙全傳』巻四）

【作例】

「耆域」（明・王世貞『有象列仙全傳』巻四、萬暦二八年［1600］刊本）

「耆城」［雲谷等碩筆］（法眼春卜一翁『和漢名畫苑』三巻、寛延二年［1749］序刊本）

きしょうかんしつ　紀昌貫蝨

紀昌は射の名人である。彼は射の名人である甘蠅の弟子飛衛に師事した。衛は昌に「物を見て目を瞬かなくなってから、はじめて射を学べる」と言った。となると、昌は妻の機の下で横になって杼の動きをじっと見つめた。二年後、錐の先をまなじりにさかさに当てても瞬かないようになった。昌は練習の成果を衛に報告したが、衛は「まだです。小さいものを大きく見えるようになってからまた来てください」と。今度は昌が牛の尻尾の毛でシラミを縛り付けて窓に吊るした。数か月後、段々大きく見えるようになり、三年後車輪の大きさまで見えるようになった。となると、ほかのものを丘のように見える。燕獣の角で作った弓とヨモギで作った矢を使ってシラミの心臓を打ち抜いても、尻尾の毛が切れなかった。

【出典】

列子曰，甘繩古之善射者，彀弓而獸伏鳥下。飛衛學射于甘繩，而巧過其師。紀昌學射于飛衛，衛曰，爾學不瞬，而後可言射。昌歸來偃臥其妻之機下，以目承牽挺。二年之後，雖錐末倒，眥而不瞬。以告衛，衛曰，未也，學視而後可。視微如著者而後告我。昌以氂懸蝨於牖而望之，旬月之間寖大也，三年之後如車輪焉。以覩余物，皆丘山也。乃以燕角之弧，朔篷之幹射之，貫蝨之心而懸不絕。（唐・李瀚撰、宋・徐子光注『蒙求集注』巻上）

【作例】

「紀昌貫蝨」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』初編巻十、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

きしょうてんごう　起承転合

「起承転合」は八股文の作文法である。

【出典】

作詩有四法，起要平直，承要春容，轉要有變化，合要淵永。（元・范德璣撰『詩格』）

【作例】

「起承転合」（橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』巻三、文政一年［1818］再刊本）

きしん　紀信

紀信（?～前204）は漢の将軍である。漢の三年（前204）、漢王劉邦が滎陽で項羽の楚軍に包囲された。危機一髪の情勢の中で、紀信は自ら漢王と称して、楚軍を欺き、項羽に焼き殺された。そのため、劉邦が脱出に成功した。

【出典】

漢將紀信說漢王曰，事已急矣。請爲王誑楚爲王，王可以間出。於是漢王夜出女子滎陽東門。被甲二千人。楚兵四面擊之。紀信乘黃屋車，傳左纛，曰，城中食盡，漢王降。楚軍皆呼萬歲。漢王亦與數十騎從城西門出，走成皋。項王見紀信，問，漢王安在。信曰，漢王已出矣。

項王燒殺紀信。（漢・司馬遷撰『史記』巻七，項羽本紀第七）

【作例】

「紀信」（『新刻劍嘯閣批評東西漢演義傳』、清初金閶書業堂刊本）

「紀信」（馬場信意撰『分類畫本良材』巻六、正徳五年［1715］須原茂兵衛・柏屋四郎兵衛蔵板）

きせんしゅつぎ　紀瞻出妓

晉の尚書である紀瞻（253～324）は、字が思遠といい、丹陽の秣陵の人である。伝えることによると、王導と周顗と諸官僚たちが舞妓を見るために紀瞻の家を訪ねた。そこで瞻は寵愛した妾を出した。彼女はよく新しい音楽を作り出せるからである。周顗は周りの視線に気にせずに彼女に声をかけた。後に役所が彼を弾劾したが、帝が彼を許したという。（唐・房玄齢等撰『晉書』巻六八、宋・祝穆撰『古今事文類聚』後集巻一六）

【出典】

世説王導與周顗及諸朝士，詣尚書紀瞻家觀妓。瞻有愛妾，能作新聲。顗問答之，顔無怍色。有司奏顗耽荒，詔原之。今本無載。（唐・李瀚撰、宋・徐子光注『蒙求集注』巻下）

【作例】

「紀瞻出妓」（下河邊拾水圖解、吉備祥顗考訂『蒙求圖會』二編巻七、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

きせんしゅんかい　喜占春魁

梅に鵲の図である。鵲はまた「喜鵲」ともいい、鳴くと縁起がいいという。

【出典】

東南謂烏啼爲凶，鵲噪爲吉，故或呼爲喜鵲。頃在山東，見人聞鵲噪則唾之，烏啼卻以爲喜，不知風俗所見如何。（北宋・朱彧《萍洲可談》巻二）

崔圓妻在家，見二鵲搆巢，共銜一木，大如筆管，長尺餘，安巢中，衆悉不見。俗言見鵲上梁必貴。（宋・錢易撰『南部新書』庚）

鵲知人喜，作巢輒在木。歲多風則去喬木。巢下枝開，戶響天，一而背。歲皆傳枝受卵。故曰，乾鵲。莊子云，烏鵲孺傳枝少欲。故曰，孺也。俗説鵲巢中必有梁，見鵲上梁者，必貴。天玄主物簿云，鵲啄槐實，結玉於腦，謂之鵲玉。此鵲終歲不復鳴噪，雖巢無胎卵。又一名飛駮，一名神女。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸一巻）

【作例】

「喜占春魁」（『孟喬和漢雜畫』巻二）

きぜんし　起然子

→「列子」

【作例】

「起然子」［狩野宗周法眼筆］（法眼春卜一翁『和漢名畫苑』四巻、寛延二年［1749］序刊本）

きそう　徽宗

宋の徽宗帝（1100～1125在位）は、名は佶といい、神宗帝の十一子である。元豊五年（1082）に宮中に生まれ、翌年名を賜った。靖康二年（1127）に金国の捕虜になり、北の胡地へ連行された。紹興五年（1135）に五国城で崩御した。紹興七年（1137）に消息が臨安の朝廷に届き、諡が「聖文仁徳顕孝皇帝」、廟號が「徽宗」と贈られた。徽宗帝が政治家として不評であったが、芸術家として宋代では一流であった。

【出典】
徽宗 體神合道駿烈遜功聖文仁德憲慈顯孝皇帝，諱佶，神宗第十一子也，母曰欽慈皇后陳氏。元豐五年十月丁巳，生於宮中。明年正月賜名，十月授鎮寧軍節度使，封寧國公。哲宗即位，封遂寧郡王。紹聖三年，以平江、鎮江軍節度使封端王，出就傅。五年，加司空，改昭德、彰信軍節度。元符三年正月己卯，哲宗崩，皇太后垂簾，（中略）乃召端王入，即皇帝位，皇太后權同處分軍國事。（元・脫脫等撰『宋史』巻十九，中華書局，一九八五年，三五七～三五八頁）
靖康元年正月己巳，詣亳州太清宮，行恭謝禮，遂幸鎮江府。四月己亥還京師。明年二月丁卯，金人脅帝北行。紹興五年四月甲子，崩于五國城，年五十有四。七年九月甲子，凶問至江南，遙上尊謚曰聖文仁德顯孝皇帝，廟號徽宗。（同上，巻二十二，四一七頁）

【作例】
「徽宗」（普斎岡子雉著述［大岡普斎］、橘辨次守国［橘辨次］圖畫『畫典通考』巻五、享保一二年［1727］刊本）

きたいきんぼ　亀臺金母

→「西王母」

【作例】
「亀臺金母」（寂照主人月僊寫並題『列仙圖賛』一、天明四年［1784］刊本）

ぎのたいそ　魏太祖

魏の太祖は後漢の曹操（155～220）のことである。彼の名は操、字は孟徳といい、沛国の譙の人である。彼は漢の献帝を人形のように操って天下に発令した。曹操が死後、長男の曹丕が漢の献帝（189～220在位）を廃し、自ら文帝と称して魏の政権を樹立した。父親曹操を魏の太祖として尊ぶ。

【出典】
太祖 武皇帝，沛國譙人也，姓曹，諱操，字孟德，漢相國參之後。［中略］太祖少機警，有權術，而任俠放蕩，不治行業，故世人未之奇也。惟梁國 橋玄、南陽 何顒異焉。玄謂太祖曰，天下將亂，非命世之才不能濟也，能安之者，其在君乎。年二十，舉孝廉爲郎，除洛陽北部尉，遷頓丘令，徵拜議郎。［中略］大將軍何進與袁紹謀誅宦官，太后不聽。進乃召董卓，欲以脅太后，卓未至而進見殺。卓到，廢帝爲弘農王而立獻帝，京都大亂。卓表太祖爲驍騎校尉，欲與計事。太祖乃變易姓名，間行東歸。出關，過中牟，爲亭長所疑，執詣縣，邑中或竊識之，爲請得解。卓遂殺太后及弘農王。太祖至陳留，散家財，合義兵，將以誅卓。冬十二月，始起兵於己吾，是歲中平六年也。［中略］二十五年春正月，至洛陽。權擊斬羽，傳其首。庚子王崩於洛陽，年六十六。遺令曰，天下尚未安定，未得尊古也。葬畢，皆除服。其將兵屯戍者，皆不得離屯部。有司各率乃職。斂以時服，無藏金玉珍寶。謚曰武王。二月丁卯，葬高陵。（晉・陳壽撰『三國志』魏書巻一，武帝紀第一）

【作例】
「魏太祖像」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物二巻、萬暦三七年［1609］刊本）
「魏太祖」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻四、享保四年［1719］刊本）

きっこう　桔梗

桔梗は「利如」とも、「房図」とも、「白薬」ともいい、嵩山及び冤句に生えていたが、今はどこでもある。根っこは小指ぐらいの大きさで、黄色で白色が帯びている。春に生え、苗の茎が一尺あまりある。

葉は杏の葉と似ていて四つの葉が対となって生える。夏に咲いた花は紫色で青色を帯びる。牽牛子花に似ている。

【出典】

桔梗生嵩高山谷及冤句，今在處有之。根如小指大，黄白色。春生，苗莖高尺餘。葉似杏葉而長楕。四葉相對而生，嫩時亦可煮食之。夏開花，紫碧色。頗似牽牛子花。秋後結子，八月採根，細剉暴乾用。葉名隱忍。其根有心。無心者，乃薺苨也。而薺苨亦能解毒，二物頗相亂。但薺苨葉下光澤，無毛爲異。開中桔梗根黄，頗似蜀葵根。莖細，青色。葉小，青色。似菊花葉。古方亦單用之。一名利如，一名房圖，一名白藥。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』草木四巻）

【作例】

「桔梗」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』草木四巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「桔梗」（渓斎義信筆『渓斎浮世畫譜』）

「桔梗」（『繪本初心柱立』三、正徳五年［1715］刊本、寶暦一一年［1761］再刊本）

きつこくけい　乞黒奚

乞黒奚には城池がない。羊や馬が産出される。韃靼に似っている。応天府（江蘇省南京）までは馬で七カ月かかるという。

【出典】

乞黒奚，無城池，出羊馬，似韃靼。至應天府馬行七個月。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十三巻）

【作例】

「乞黒奚」（明・王圻、王思義『三才圖會』人物十三巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「乞黒奚」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻四、享保四年［1719］刊本）

きつふんこうぎ　詰汾興魏

北魏の聖武皇帝の名前は詰汾という。彼は山や澤を巡行した際、天女と見初める。翌年同じ時間で会いに行くと、授かった子どもをもらった。天女は言った。「この子は上様の子です。帝王になるはずです」と。その子はすなわち後の北魏の祖として尊ばれた神元皇帝力微であるという。

【出典】

北史魏聖武皇帝諱詰汾，嘗田于山澤，見輜軿自天而下，既至，見美婦人自稱天女，受命相偶，旦日請還。期年周時復會于此。言終而別。及期，帝至先田處，果見天女所生男，授帝曰，此君之子也，當世為帝王。語訖而去。卽始祖神元皇帝也。故時人曰，詰汾皇帝無婦家，力微皇帝無舅家。力微，神元諱。（唐・李瀚撰、宋・徐子光注『蒙求集注』巻上）

【作例】

「詰汾興魏」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』初編巻五、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

きしょう　帰樵

【作例】

「帰樵」（老蓮先生著『畫圖酔芙蓉』中巻、享和三年［1803］序、文化六年［1809］叙、文化六年［1809］刊本）

ぎちょう　魏徵

魏徵（580～643）、字は玄成といい、鉅鹿曲城の人である。魏徵は幼い頃両親を亡くし、生活が苦しかった。しかし、彼は大志を抱き、出家して道士になった。読書が好きで、知識の面が広い。天下が混乱

しはじめたため、魏徵は政治の道を歩みたいことを決心した。隋の煬帝（604～617在位）の大業（605～617）の末、武陽郡丞の元寶蔵が反乱の旗を揚げ、李密と呼応する。寶蔵は魏徵を招き、典籍を司る書記に任命した。李密が寶蔵の上奏文を見るたびに感心した。後に魏徵が書いたのを聞き、すぐ使者を派遣して迎えた。徵は十の策を密に建言した。密は感心したが、結局使えなかった。後に唐の太宗が即位してから、右僕射が空いたので、徵を任命したかったが、徵が固辞した。皇太子は徳行を修行しないため、朝廷内外の評判がよくない。太宗が大変立腹して、臣下に「今日大臣の中に魏徵を超える忠臣がいない。私は彼に皇太子の師になってもらいたい。天下に失望させないように。」と言った。十六年、太子の師として任命したが、徵は病気の理由で辞退した。しかし、太宗は詔書で「漢の太子には四皓がいた。私を助けるのはあなたしかいないのだ。あなたは病気にかかっているのは承知しているが、横になって療養しながら、太子を守ってやってほしい。」と説得した。魏徵のために、太宗は急いで小さな宮殿を建て、五日間で完成した。魏徵が危篤状態に陥った際、太宗は何回も見舞いに行って、魏徵を撫でながら泣いた。何か言いたいことがあるかと尋ねたら、徵は「私は周りの大臣を心配しないが、太子の事を憂慮する。」と答えた。数日後亡くなった。太宗は夜魏徵を夢に見た。朝になると、悲報が来た。太宗が悲しくて、梁公に言った。「銅を以て鏡とすれば、衣冠を正すことができる。歴史を以て鏡とすれば、王朝が交代の原因を知ることができる。人を以て鏡とすれば、自分の誤りを明らかにすることができる。私は今までこの三つの鏡を以て、自分の誤りを防いできたが、今日魏徵が亡くなったので、私は一つの鏡をなくした。」と言った。

【出典】

魏徵，字玄成，鉅鹿曲城人也。父長賢，北齊屯留令。徵少孤貧落拓，有大志，不事生業，出家爲道士。好讀書，多所通涉。見天下漸亂，尤屬意縱横之說。大業末，武陽郡丞元寶藏舉兵以應李密，召徵使典書記，密每見寶藏之疏，未嘗不稱善。既聞徵所爲，遽使召之，徵進十策以干密。雖奇之而不能用。［中略］是後右僕射缺，欲拜之，徵固讓乃止。及皇太子承乾不修德業，魏王泰寵愛日隆，内外庶僚並有疑議，太宗聞而惡之，謂侍臣曰，當今朝臣忠謇無踰魏徵，我遣傅皇太子用，絶天下之望。十六年，拜太子太師，知門下省事如故。徵自陳有疾，詔答曰，漢之太子四皓，爲助我之。賴公卽其義也。知公疾病可臥護之，其年稱綿惙中使相望。徵宅先無正寢，太宗欲爲小殿，輟其材爲徵營構，五日而成。遣中使齎素褥布被而賜之，遂其所尚也。及病篤，輿駕再幸其第，撫之流涕，問所欲言。徵曰，嫠不恤緯，而憂宗周之。亡後數日，太宗夜夢徵若平生，及旦而奏徵薨。時年六十四。（後晉・劉昫等撰『舊唐書』巻七十一，列傳第二十一）

太宗謂梁公曰，以銅爲鏡，可以正衣冠。以古爲鏡，可以知興替。以人爲鏡，可以明得失。朕嘗保此三鏡，用防己過。今魏徵殂逝，一鏡亡矣。（宋・王讜撰『唐語林』巻四）

【作例】

「魏徵」（清・顧沅輯『古聖賢像傳略』、道光一〇年［1830］刻本）

「魏徵」（清・劉源繪『凌煙閣功臣圖』、康熙七年［1668］蘇州柱笏堂刻本）

「魏徵」（橘有税［橘氏宗兵衛］繪『繪本通寶志』巻五上、享保一四年［1729］刊本）

きっさのず　喫茶圖

人々が茶を飲んでいる風景である。

【出典】

一椀喉吻潤，二椀破孤悶，三椀搜枯腸，四椀發輕汗，五椀肌骨輕，

六椀通仙靈，七椀喫不得，唯覺兩腋習習清風生。（「喫茶圖」題詩，清刊本『點石齋叢畫』、光緒一一年［1885］序刊本）

【作例】

「無題」（『點石齋叢畫』、光緒一一年［1885］序、上海點石齋書局石印本）

「喫茶圖」（信天翁月岡法橋雪鼎纂『和漢名筆金玉畫府』巻六・補遺、明和八年［1771］刊本）

きつじやくこく　吉慈厄國

吉慈厄国は北西に近く、山々に囲まれている。金や銀が産出するため、大変裕福である。礼拝堂が百余りある。畜産に駱駝や馬が多い。気候は大変寒い。

【出典】

吉慈厄國，皆大山圍繞，盤山爲城，禮拜堂百餘所。出金銀、金絲錦，富國。民居住皆層樓，多畜牧駞馬，地近西北，極寒。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十四巻）

【作例】

「吉慈厄國」（明・王圻、王思義『三才圖繪』人物十四巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「吉慈厄國」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻五、享保四年［1719］刊本）

きつちゅうせん　橘中仙

「橘中仙」は、橘の中で将棋をさしている四人の仙人の話であるという。

【出典】

有巴邛人不知姓名，家有橘。霜後諸橘盡收。餘二大橘，如三四斗盎。巴人卽令攀摘。輕重亦如常橘。割開每橘有二叟，鬚眉皤然，肌體紅明，皆相對象棋。身尺餘，談笑自若。但與決賭畢，一叟曰，君輸我。一叟曰，君輸我，後日先生於青城草堂還我耳。一叟曰，王先生許我來，竟待不得。橘中之樂，不減商山。但不得根深固蔕於橘中耳。一叟曰，僕饑虛矣，須龍根脯食之。卽於袖中抽出一草根，方圓徑寸，形狀宛轉如龍，毫釐周悉。因削食之，隨削隨滿。食訖，以求噀之，化爲一龍，四叟共乘之。足下雲起，須臾風雨晦暝，不知所在。（宋・胡繼宗撰『書言故事大全』巻四）

【作例】

「橘中仙」（橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』巻四、貞享四年［1687］刊本、文政一年［1818］再刊本）

きつふん　詰汾

聖武皇帝詰汾はかつて数万の騎兵を率い、山の池に行ったところ、突然車が空から降りてきた。一人の美婦人が車から降りて、侍従が多くいた。帝が不思議に尋ねると、婦人は「私は天女だ。命を受け、あなたと子作りをする。」と言った。すると一緒に寝た。翌日の朝、帰る前に、「来年のこの時に、ここでまた会おう。」と言い終わると、帰った。去って行った際、風や雨のようであった。約束の時期になると、帝が前の同じ場所に来た。天女は果たして子供を連れてきた。彼女は生まれた男の子を帝に渡し、「この子はあなたの子供だよ。どうかよく面倒を見て、子子孫孫帝位を伝えて下さい。」と言い終わると、去って行った。その子供はすなわち北魏の始祖である。故に「詰汾皇帝は奥さんがいない。力微皇帝は叔父さんがいない」ということわざがある。

【出典】

聖武皇帝諱詰汾。嘗田於山澤，欻見輜軿自天而下。既至，見美婦人

自稱天女，受命相偶。旦日請還，期年周時復會於此。言終而別。及期，帝至先田處，果見天女，以所生男授帝，曰，此君之子也，當世爲帝王。語訖而去。卽始祖神元皇帝也。故時人諺曰，詰汾皇帝無婦家，力微皇帝無舅家。帝崩，神元皇帝立。（唐・李延壽撰『北史』巻一，魏本紀第一）

【作例】

「北魏祖逢天女」（秭陵陳氏尺蠖斎評釋『新鍥重訂出像注釋通俗演義東西両晋志傳題評』、萬暦年間［1573-1620］刊本）

「詰汾」（橘有税『繪本故事談』巻二、正徳四年［1714］刊本）

きつふん　吉翂

吉翂、字は彦霄といい、馮翊蓮勺（陝西省大荔）の人である。梁の天監（502～519）初年、吉翂の父親が人に罪を陥れられたため、死刑となった。吉翂は当時十五歳であったが、上京して冤罪を訴えながら、父親の代わりに死にたいと申し出たが、梁の武帝（502～549在位）は彼の父親を恩赦した。丹陽尹王志は吉翂を孝子として推薦したいが、翂は「不思議だ。王尹はどう考えたか。私はそれに当たらないよ。父親が辱められたら、子として死ぬのは当たり前だ。これは筋だ。私はそれに当たったら、さらに父親に恥をかくことになる。」と言い、固く辞退した。十七歳の頃、湘州の刺史柳忱が吉翂を主簿に任用した。後に心臓病のため亡くなった。

【出典】

吉翂字彦霄，馮翊蓮勺人也，世居襄陽。翂幼有孝性。年十一，遭所生母憂，水漿不入口，殆將滅性，親黨異之。天監初，父爲吳興原鄉令，爲姦吏所誣，逮詣廷尉。翂年十五，號泣衢路，祈請公卿，行人見者，皆爲隕涕。其父理雖清白，恥爲吏訊，乃虛自引咎，罪當大辟。翂乃撾登聞鼓，乞代父命。［略］法度具以奏聞，高祖乃宥其父。丹陽尹王志求其在廷尉故事，并請鄉居，欲於歲首，舉充純孝之選。翂曰，異哉王尹，何量翂之薄乎。夫父辱子死，斯道固然；若翂有靦面目，當其此舉，則是因父買名，一何甚辱。拒之而止。年十七，應辟爲本州主簿。出監萬年縣，攝官期月，風化大行。自雍還至郢，湘州刺史柳忱復召爲主簿。後鄉人裴儉、丹陽尹丞臧盾、揚州中正張仄連名薦翂，以爲孝行純至，明通易、老。敕付太常旌舉。初，翂以父陷罪，因成悸疾，後因發而卒。（唐・姚思廉撰『梁書』巻四十七，列傳第四十一）

【作例】

「吉翂」（大岡春卜『和漢故事卜翁新畫』巻一、寛延四年［寶暦］年］序、寶暦三［1753］刊本）

きたくせん　季謫仙

【作例】

「季謫仙」［夢筆生花］（法眼春卜一翁纂『和漢雙玉丹青錦嚢』巻三、寛延二年［1749］序、寶暦三年［1753］刊本）

ぎはくよう　魏伯陽

魏伯陽は呉の人である。彼は道術が好きで、出世するのが嫌いである。そのため、彼が山に入り、丹薬を作ることにした。伯陽には三人の弟子がいる。その中の二人は誠意がない。従って丹薬ができた後、伯陽がわざと先に愛犬に調合していない丹薬を飲ませた。その愛犬が即死した。次に伯陽も飲み、同様即死した。一人の虞姓の弟子は「師は凡人ではないのだ。丹薬を飲んだのはわざとではなかろうか」といい、彼も飲み、即死した。残りの二人は相談した。「そもそも丹薬を作るのは長生きのためだ。今丹薬を飲むと即死する。飲まない方がいい。それなら、まだ数十年は生きられる」と。ついに丹薬を飲むのを

止め、ともに山を出た。二人が去った後、伯陽がすぐ起き、調合した丹薬を弟子と犬に飲ませた。しばらくすると皆が生き返った。そこで伯陽が虞姓の弟子と愛犬と一緒に昇天した。途中、木を伐採する人と出会い、二人の弟子宛の手紙を託した。二人がその手紙を読むと、大変後悔した。

【出典】

魏伯陽，吳人。性好道術，不樂仕宦，乃入山作神丹。時三弟子，知兩弟子心不盡誠。丹成，試之曰，金丹雖成，當先試之犬。犬無患，方可服。若犬死，不可服也。伯陽入山時，曾攜一白犬自隨。凡丹數轉未足，和合未至者，稍有毒。服之則暫死。伯陽卽以丹與犬食之，犬卽死。伯陽曰，作丹未成，今犬死，無乃未得神明之意耶。服之恐復如犬，奈何。弟子曰，先生服之不。伯陽曰，吾背違世路，委家於此，不得仙。吾亦恥歸，死與生同。吾當服之。伯陽服丹，入口卽死。一弟子曰，師非凡人也，服丹而死，得無有意乎。亦服之，入口亦死。二弟子乃相謂曰，作丹求長生爾。今服丹卽死，不如不服，尚得數十年活。遂不服。乃共出山，欲爲伯陽及死弟子求殯具。二人去後，伯陽卽起，將煉成妙丹納死弟子及犬口中，須臾皆活。於是將服丹弟子姓虞者，同犬仙去。逢入山伐薪人，作手書寄謝二弟子。弟子見書，始大懊惱。伯陽嘗作參同契，五相類，凡二卷。其說似解周易。其實假借爻象以寓作丹之旨。（明・王世貞撰『有象列仙全傳』巻三）

【作例】

「魏伯陽」（明・王世貞『有象列仙全傳』巻三、萬曆二八年［1600］刊本）

「魏伯陽」（明・洪應明『仙佛奇踪』巻一、萬曆三〇年［1602］刊本）

「魏伯陽」（明・王圻、王思義『三才圖會』人物十巻、萬曆三七年［1609］刊本）

「魏伯陽」（『任渭長畫傳四種』於越先賢傳、中国古畫譜集成第四巻、山東美術出版社、2000年）

「魏伯陽」（寂照主人月僊寫並題『列仙圖賛』三、天明四年［1784］刊本）

きひ　貴妃

→「楊貴妃」

【作例】

「貴妃」［文徵明筆］（法眼春卜一翁集『畫史會要』巻二、寛延四年［1751］刊本）

きひほうし　貴妃方士

「貴妃方士」は白楽天の『長恨歌』により描いた絵である。

【出典】

漢皇重色思傾國，御宇多年求不得。楊家有女初長成，養在深閨人未識。天生麗質難自棄，一朝選在君王側。回眸一笑百媚生，六宮粉黛無顏色。春寒賜浴華清池，溫泉水滑洗凝脂。侍兒扶起嬌無力，始是新承恩澤時。雲鬢花顏金步搖，芙蓉帳暖度春宵。春宵苦短日高起，從此君王不早朝。承歡侍宴無閒暇，春從春遊夜專夜。後宮佳麗三千人，三千寵愛在一身。（中略）臨邛道士鴻都客，能以精誠致魂魄。爲感君王展轉思，遂教方士殷勤覓。排空馭氣奔如電，昇天入地求之徧。上窮碧落下黃泉，兩處茫茫皆不見。忽聞海上有仙山，山在虛無縹緲間。樓閣玲瓏五雲起，其中綽約多仙子。中有一人字太眞，雪膚花貌參差是。金闕西廂叩玉扃，轉教小玉報雙成。聞道漢家天子使，九華帳裏夢魂驚。攬衣推枕起裴回，珠箔銀屏邐迤開。雲鬢半偏新睡覺，花冠不整下堂來。風吹仙袂飄颻舉，猶似霓裳羽衣舞。玉容寂寞淚闌干，梨花一枝春帶雨。含情凝睇謝君王，一別音容兩渺茫。昭陽殿裏恩愛絕，蓬萊宮中日月長。回頭下望人寰處，不見長安見塵霧。

唯將舊物表深情，鈿合金釵寄將去。釵留一股合一扇，釵擘黃金合分鈿。但教心似金鈿堅，天上人間會相見。臨別殷勤重寄詞，詞中有誓兩心知。七月七日長生殿，夜半無人私語時。在天願作比翼鳥，在地願爲連理枝。天長地久有時盡，此恨緜緜無絶期。（白居易「長恨歌」，清・彭定求等撰『全唐詩』巻四百三十五）

【作例】

「無題」［貴妃方士］（清・洪昇『長生殿』、清刊本）

「貴妃方士」（法眼春卜一翁纂『和漢雙玉丹青錦嚢』巻三、寛延二年［1749］序、寶暦三年［1753］刊本）

きふ　季布

季布は楚の人である。任侠で有名である。項羽の部下として何回も漢王劉邦を追い詰めたことがある。後に、劉邦が漢の高祖になった後、千金の懸賞金を出して季布を指名手配したが、後に恩赦され、郎中に任用された。漢の恵帝（前195～188在位）の頃、中郎将になり、漢の文帝（前180～157在位）の頃、河東太守であった。

【出典】

季布者，楚人也。爲氣任俠、有名於楚。項籍使將兵。數窘漢王。及項羽滅，高祖購求布千金。敢有舍匿、罪及三族。季布匿濮陽周氏。周氏曰，漢購將軍急。迹且至臣家。將軍能聽臣，臣敢獻計。即不能，願先自剄。季布許之。迺髡鉗季布，衣褐衣，置廣柳車中。并與其家僮數十人、之魯朱家所賣之。朱家心知是季布，迺買而置之田。誡其子曰，田事聽此奴，必與同食。朱家迺乘輜車之洛陽、見汝陰侯滕公。滕公留朱家，飲數日。因謂滕公曰，季布何大罪，而上求之急也。滕公曰，布數爲項羽窘上，上怨之。故必欲得之。朱家曰，君視季布何如人也。曰，賢者也。朱家曰，臣各爲其主用。季布爲項籍用，職耳。項氏臣可盡誅邪。今上始得天下，獨以己之私怨求一人，何示天下之不廣也。且以季布之賢，而漢求之急如此。此不北走胡、即南走越耳。夫忌壯士以資敵國。此伍子胥所以鞭荊平王之墓也。君何不從容爲上言邪。汝陰侯滕公，心知朱家大俠，意季布匿其所，迺許曰，諾。待間，果言如朱家指。上迺赦季布。當是時，諸公皆多季布能摧剛爲柔。朱家亦以此名聞當世。季布召見，謝。上拜爲郎中。（漢・司馬遷撰『史記』巻一百，季布欒布列傳第四十）

【作例】

「季布」（馬場信意撰『分類畫本良材』巻六、正徳五年［1715］須原茂兵衛・柏屋四郎兵衛蔵板）

きふいちだく　季布一諾

楚の曹丘生が季布に会いたい。しかし、季布は曹の人格を嫌うため、会いたがらない。曹は無理矢理に訪ねて、季は仕方がなく会った。曹は季に会うと、すぐ挨拶の礼をして、「楚人の諺では、『黄金百斤を得ても、季布の一つの承諾に当たる価値がない』という。なぜ足下がこの名声を梁と楚の間で上げたかというと、僕も楚人ですので、僕が足下の名声を上げたからのです。なのに、足下がなぜ僕のことを拒んでいるでしょうか」と言った。そこで季布が曹を手厚くもてなしたという。

【出典】

楚人曹丘生，辯士，數招權顧金錢。事貴人趙同等，與竇長君善。季布聞之，寄書諫竇長君曰，吾聞曹丘生非長者，勿與通。及曹丘生歸，欲得書請季布。竇長君曰，季將軍不說足下，足下無往。固請書，遂行。使人先發書，季布果大怒，待曹丘。曹丘至，即揖季布曰，楚人諺曰，得黃金百，不如得季布一諾。足下何以得此聲於梁楚間哉。且僕楚人，足下亦楚人也。僕游揚足下之名於天下，顧不重邪。何足下拒僕之深也。季布迺大說，引入留數月，為上客，厚送之。季布名

所以益聞者，曹丘揚之也。（漢・司馬遷撰『史記』巻一〇〇）

【作例】

「季布一諾」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』初編巻六、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

きほうさんげん　喜報三元

「喜報三元」は唐子と鵲と三つの龍眼の果実の絵である。鵲はまた「喜鵲」ともいい、ここでは「喜報」（吉報、喜びなど）の意味に譬える。「三元」とは科挙試験の郷試、会試、殿試のそれぞれの第一名である解元、会元、状元を指す。龍眼の果実は「桂圓」といい、「圓」は「元」（yuán）と同じ発音であるため、語呂合わせで「三元」の意味を表す。したがってこの絵は人々の子供に出世を願う気持ちを表現している。中国年画の画題としてよく見られる。

【出典】

時人之家聞鵲聲，皆爲喜兆，故謂靈鵲報喜。（五代・王仁裕撰『開元天寶遺事』巻下）

東南謂烏啼爲凶，鵲噪爲吉，故或呼爲喜鵲。頃在山東，見人聞鵲噪則唾之，烏啼卻以爲喜，不知風俗所見如何。（北宋・朱彧撰『萍洲可談』巻二）

崔圓妻在家，見二鵲構巢，共銜一木，木大如筆管，長尺餘，安巢中。衆悉不見。俗言見鵲上樑必貴。（宋・錢易撰『南部新書』庚）

北人以烏聲爲喜，鵲聲爲非。南人聞鵲噪則喜，聞烏聲則唾而逐之，至於弦弩挾彈，擊使遠去。北齊書，奚永洛與張子信對坐，有鵲正鳴於庭樹間。子信曰，鵲言不善，當有口舌事，今夜有喚，必不得住。子信去後，高儼使召之，且云勑喚，永洛詐稱墮馬，遂免於難。白樂天在江州答元郎中、楊員外喜烏見寄曰，南宮鴛鴦地，何忽烏來止。古人錦帳郎，聞烏笑相視。疑烏報消息，望我歸鄉里。我歸應待烏頭白，慙愧元郎誤歡喜。然則鵲言固不善，而烏亦能報喜也。又有和元微之大觜烏一篇云，老巫生姦計，與烏意潛通。云此非凡鳥，遙見起敬恭。千歲乃一出，喜賀主人翁。此鳥所止家，家產日夜豐。上以致壽考，下可宜田農。案微之所賦云，巫言此烏至，財產日豐宜。主人一心惑，誘引不知疲。轉見烏來集，自言家轉孳。專廳烏喜怒，信受若長離。今之烏則然也。世有傳陰陽局鴉經，謂東方朔所著，大略言凡烏之鳴，先數其聲，然後定其方位，假如甲日一聲，卽是甲聲，第二聲爲乙聲，以十干數之，乃辨其急緩，以定吉凶，蓋不專於一說也。（宋・洪邁撰『容齋續筆』巻三）

【作例】

「喜報三元」（『中国濰坊清末年画』、山東畫報出版社、2004年）

きほうそうしゅん　喜報早春

「喜報早春」は白梅、茶梅、竹、霊芝に鵲の絵である。喜鵲は「喜報」（「喜報三元」の条をご参考下さい）の意味で、白梅、茶梅、竹、霊芝は「早春」の意味である。

ぎぼつ　魏勃

魏勃は若い頃斉相の曹参の舎人であった。斉の悼恵王の頃、魏勃は内史を拝命し、斉の哀王の頃、魏勃は内相を拝命した。呂后が亡くなった後、魏勃は斉の軍隊を率いて、呂氏一族を攻撃し、斉王を帝に立てたかった。呂氏一族が掃滅された後、灌嬰が使者を遣って問責した。魏勃は「火事の家には、先に親に報告してから消火するはずがないだろう。」と言い終わって、下がった。その時に、魏勃の両足が震えてとまらなかった。遂に放免された。

【出典】

灌嬰在滎陽聞魏勃本教齊王反、卽誅呂氏，罷齊兵，使使召責問魏勃。

勃曰，失火之家，豈暇先言大人而後救火乎。因退立，股戰而栗，恐不能言者。終無他語。灌將軍孰視笑曰。人謂魏勃勇，妄庸人耳。何能爲乎。乃罷魏勃。魏勃父以善鼓琴見秦皇帝。及魏勃少時，欲求見齊相曹參。家貧無以自通。乃常獨早夜掃齊相舍人門外。相舍人怪之，以爲物而伺之。得勃。勃曰，願見相君無因。故爲子埽、欲以求見。於是舍人見勃。曹參因以爲舍人。（漢・司馬遷撰『史記』巻五十二，齊悼王惠王世家第二十二）

【作例】

「魏勃」（馬場信意『分類畫本良材』巻三、正徳五年［1715］刊本）

「魏勃」（文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年［1803］刊本）

「魏勃」（文鳳駿聲『文鳳龕畫』、享和三年［1803］刊本）

ぎぼつそうもん　魏勃掃門

前漢の魏勃が若い頃、斉の宰相曹参に会いたいが、家が貧しくツテがない。そこで、常に曹参の舎人の門外で掃除する。舎人が不思議に思い、下の人に聞かせたが、勃は「宰相に会いたいが、そのツテがない」と答えた。すると、舎人が勃を曹参に合わせたのである。

【作例】

前漢 魏勃，少時欲求見齊相曹參。家貧無以自通。乃常獨掃齊相舍人門外。舍人怪之。因特令閽者而問之。勃曰，願見相君無因。故爲子爲掃。於是舍人見勃 曹參，因以爲舍人。（唐・李瀚撰、宋・徐子光注『蒙求集注』巻下）

【作例】

「魏勃掃門」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』二編巻七、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

きみいえちゅうするいづれのところに　君家住何處

唐の崔顥の「長干行（ちょうかんこう）」という五言絶句を図解する絵である。

【出典】

君家住何處，妾住在横塘。停舩暫借問，或恐是同鄉。（崔顥「長干行」，明・李攀龍編『唐詩選』巻六・五言絶句）

【作例】

「君家住何處」（『百人一詩畫譜』、安永三年［1774］原刻、寛政六年［1794］再刻本）

「君家住何處」（石峯先生書画『畫本唐詩選』一編、天明八年［1788］嵩山房原刻、文化二年［1805］再刻本）

きめいさぶろうせきしゅう　擇命三郎石秀

→「捨命三郎石秀」、「拚命三郎石秀」

【作例】

「擇命三郎石秀」（江境菴花川編、月岡芳年筆『繡像水滸銘々傳』初編、慶應三年［1867］序、大橋堂梓・蔵板）

きもくおんば　喜沐恩波

「喜沐恩波」は喜鵲が水に浴する図である。喜鵲は「喜び」（「喜報三元」の条をご参考ください）の意味である。

きゃくしんおどろきらくぼく　客心驚落木

唐の薛稷（せつしょく）の「秋朝覧鏡」という五言絶句を図解する絵である。

【出典】

客心驚落木，夜坐聽秋風。朝日看容鬢，生涯在鏡中。（薛稷「秋朝覧鏡」，清・彭定求等編『全唐詩』巻九十三）

【作例】
「客心驚落木」（『百人一詩畫譜』、安永三年［1774］原刻、寛政六年［1794］再刻本）

きやようしゅう　季野陽秋

晉の褚裒は、字が季野といい、河南陽翟の人で、康献皇后の父親である。桓彝は褚裒のことを「皮裏陽秋」（裏表ある）と評価している。すなわち、「季野陽秋」とは褚裒は裏表のある人であるという意味である。

【出典】
晉 褚裒字季野，河南 陽翟人。康獻皇后父也。少有簡貴之風。與杜乂俱有盛名，冠於中興。桓彝目之曰，季野有皮裡陽秋。言其外無臧否而內有所褒貶也。（唐・李瀚撰、宋・徐子光注『蒙求集注』巻上）

【作例】
「季野陽秋」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』初編巻六、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

きゅうあん　汲黯

汲黯、字は長孺といい、濮陽の人である。先祖は衛の国の主君の近臣であった。汲黯まで七代目になるが、代代貴族であった。汲黯は父親の関係で、漢の孝景帝（前157～141在位）の頃太子洗馬を務めた。孝景帝が崩御した後、太子が即位した。黯は謁者に任用された。東越が攻め合うので、帝は黯を派遣して視察した。途中で、呉まで行って戻ってきた。帝に「越人が互い攻め合うのは昔からの風習であり、わざわざ天子の使者を行かせる必要がない。」と報告した。河内に火事があった。千余りの民家が延焼された。帝はまた黯を派遣して行った。帰ってから帝に「家の人が不注意で火事になり、家屋が延焼してしまい、特に心配することがない。それより、臣下が河南を通った時に、あそこの人々は大変貧しい。洪水や干ばつで被害の民家は一万あまりで、親子が互いに食べたりした。臣下は臨機応変で、河南の蔵を開け、食糧を貧民の救済にあてた。臣下は陛下の名義で勝手にやったことを罪と承知しているので、どうぞ処罰してください。」と報告した。帝は汲黯がやったことを正しいと思い、許した。その代りに滎陽令に左遷した。黯は令を恥と思い、病気の理由で帰郷した。帝はそれを聞き、中大夫に任命した。しかし黯はよく帝に諫めるため、長く宮内にいられない。東海太守に出向した。黯は道家の論理を実践し、清静無為で何もせずに、有能な官吏を任用して任せるだけであった。一年余りで、東海はかなり変貌し、人民は皆黯を称賛した。帝がそれを聞き、黯を主爵都尉に任命し、九卿の位に相当する。黯は人の過失を許さない性格で、自分と気のあう人にはやさしい。気の合わない人には厳しい。そのため、人々は彼から遠ざかる。諫める時も決して帝の顔色を伺わない。かつて帝が幕舎に冠を被らず座っている時に、黯が報告しにきた。帝が遠く彼の姿を見て、慌てて幕舎の後ろに逃げ込み、臣下に彼の奏請を許可すると指示した。帝さえ黯を畏敬している。

【出典】
汲黯，字長孺。濮陽人也。其先有寵於古之衛君。至黯七世，世爲卿大夫。黯以父任，孝景時爲太子洗馬，以莊見憚。孝景帝崩，太子卽位，黯爲謁者。東越相攻。上使黯往視之，不至，至吳而還。報曰，越人相攻，固其俗然。不足以辱天子之使。河內失火，延燒千餘家。上使黯往視之。還報曰，家人失火，屋比延燒，不足憂也。臣過河南。河南貧人，傷水旱萬餘家。或父子相食。臣謹以便宜持節，發河南倉粟，以振貧民。臣請歸節，伏矯制之罪。上賢而釋之，遷爲滎陽令。黯恥爲令，病歸田里。上聞，乃召拜爲中大夫。以數切諫，不得久留內，遷爲東海太守。黯學黃老之言。治官理民，好清靜，擇丞史而

任之。其治，責大指而已。不苛小。黯多病，臥閨閤内，不出。歲餘，東海大治。稱之。上聞，召以爲主爵都尉，列於九卿。治務在無爲而已。弘大禮不拘文法。黯爲人性倨少禮。面折不能容人之過。合己者善待之。不合己者不能忍見。士亦以此不附焉。然好學游俠，任氣節，内行脩絜，好直諫，數犯主之顔色，常慕傅柏、袁盎之爲人也。善灌夫、鄭當時及宗正劉弃。亦以數直諫、不得久居位。［中略］上嘗坐武帳中。黯前奏事。上不冠。望見黯避帳中，使人可其奏。其見敬禮如此。（漢・司馬遷撰『史記』巻一二〇）

【作例】

「汲黯」（清・顧沅輯『古聖賢像傳略』巻二、道光一〇年［1830］刻本）

「汲黯」（橘有税『繪本故事談』巻八、正徳四年［1714］刊本）

きゅうえいのひつい　仇英筆意

【作例】

「神獣に乗る仙人と鬼たち」（瓜生政和著、河鍋洞郁畫『暁斎畫談内篇』巻下、明治二〇年［1887］刊本）

きゅうえいばい　九英梅

【作例】

「九英梅」（明・程大約『程氏墨苑』巻七、萬暦二二～三七年［1594～1609］刊本）

「九英梅」（大原民聲編、浅野思成筆『名数畫譜』地、文化六年［1809］序刊本）

きゅうぎさん　九嶷山

九嶷山は永州の寧遠から南六十里にある。

【出典】

九嶷山在永州府寧遠縣南六十里。晉郭璞云，其山九谿皆相似。或云九峯參差互相隱映，望而疑之，故名。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理十巻）

【作例】

「九疑山」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理一〇巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「九嶷山」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻二、享保四年［1719］刊本）

きゅうぐのず　九貢圖

九貢とは祀貢（祭祀に供える家畜や酒など）、嬪貢（皮や帛など）、器貢（祭祀に使用する器具や貨幣や刺繍の帛など）、材貢（木材など）、貨貢（真珠や貝など）、服貢（祭祀用の服）、斿貢（羽毛）、物貢（中国以外に各国の珍しいもの）である。『程氏墨苑』の「九貢圖」に「蛮夷竭歓、象来致福」（蛮夷が皆喜び、象が福を届ける）と書いている。

【出典】

以九貢致邦國之用，一曰祀貢，二曰嬪貢，三曰器貢，四曰幣貢，五曰材貢，六曰貨貢，七曰服貢，八曰斿貢，九曰物貢。（『周禮』巻二・太宰）

【作例】

「九貢圖」（明・程大約『程氏墨苑』巻八、萬暦二二～三七年［1594～1609］刊本）

「九貢」（大原民聲編、浅野思成筆『名数畫譜』地、文化六年［1809］

序刊本）

きゅうけつははががまどくをりょうすをゆめみる
丘傑夢母療蝦蟇毒

丘傑が、字は偉跱といい、呉興の烏程の人である。十四歳の頃、彼の母親が亡くなった。一年余りの後、彼は突然母親の夢を見た。母親は「君が生野菜を食べる際、蝦蟇の毒あたりになる。霊床の前に三粒の薬があり、それを飲めば治る。」と言った。傑はびっくりして目が覚めた。薬を見つけて飲んだ。すると、腹から数升のオタマジャクシを排泄したという。

【出典】

丘傑字偉跱，呉興烏程人也。十四遭母喪，以熟菜有味，不嚐於口。歳餘忽夢見母曰，死止是分別耳，何事乃爾荼苦。汝噉生菜，遇蝦蟇毒，靈床前有三丸藥可取服之。傑驚起，果得甌，甌中有藥，服之下蝌蚪子數升。丘氏世保此甌。大明七年，災火焚失之。（唐・李延壽撰『南史』巻七十三，列傳第六十三）

【作例】

「丘傑夢母療蝦蟇毒」（貝原先生遺稿、浦川公左畫圖『續二十四孝繪抄』、天保一三年［1842］、嵩山房・宋榮堂合梓）

きゅうじうそうこう　急時雨宋江

急時雨宋江は『水滸伝』の中の豪傑の一人である。急時雨は彼の綽名である。宋江はもと山東鄆城県の下級官吏であったが、後に梁山泊に入り、首領になった。

【出典】

那押司姓宋名江，表字公明，排行第三，祖居鄆城縣宋家村人氏。爲他面黑身矮，人都喚他做黑宋江。又且於家大孝，爲人仗義疎財，人皆稱他做孝義黑三郎。［略］這宋江自在鄆城縣做押司。他刀筆精通，吏道純熟，更兼愛習鎗棒，學得武藝多般。平生只好結識江湖上好漢。但有人來投奔他的，若高若低，無有不納。便留在莊上館穀，終日追陪。并無厭倦。若要起身，盡力資助。端的是揮霍，視金似土。人問他求錢物，亦不推託。且好做方便。每每排難解紛，只是賙全人性命。如常散施棺材藥餌，濟人貧苦，賙人之急，扶人之困。以此山東、河北聞名，都稱他做及時雨。卻把他比的做天上下的及時雨一般，能救萬物。（百二十回本『水滸傳』第十八回）

【作例】

「呼保義宋江」（明・陳洪綬『水滸葉子』、天啓六年［1626］刊本）

「宋江・戴宗」（『水滸全圖』、杜先生菫爲之補圖、光緒六年［1880］刊本）

「宋江」（清・陸謙繪『天罡地煞圖』不分巻、天保六年［1835］和刻本）

「急時雨宋江［公］明」（仮名垣魯文標記、一雲斎国久畫『繡像水滸銘々傳』前編下、弘化五年［1848］刊本）

「急時雨宋江［公］明」（柳水亭種清著、葵岡北渓畫『水滸畫傳』、安政三年［1856］序、甘泉堂板））

きゅうしのず　九子圖

「唐子遊び」の一つで、九人の子どもが遊んでいる構図である。

【作例】

「九子墨」（明・程大約『程氏墨苑』巻五、萬暦二二～三七年［1594～1609］刊本）

「九子圖」（『點石齋叢畫』、光緒一一年［1885］序、上海點石齋書局石印本）

「九子圖」（大原民聲編、浅野思成筆『名数畫譜』地、文化六年［1809］

序刊本）

きゅうしゃくのず　九錫圖

天子より人徳のある諸侯にご褒美として次のようなものを賜る。一は車と馬、二は服、三は勇士、四は楽器、五は木製の宮殿に上がるための階段のようなもの、六は赤門、七は弓と矢、八は鈇鉞という武器、九は祭祀用の酒で、合わせて九錫という。

【出典】

禮記九錫，車馬、衣服、樂、朱戸、納陛、虎賁、鈇鉞、弓矢、秬鬯，皆隨其德可行，而賜車馬，能安民者。賜衣服，能使民和樂者。賜以樂，民衆多者。賜以朱戸，能進善者。賜以納陛，能退惡者。賜以虎賁，能誅有罪者。賜以鈇鉞，能征不義者。賜以弓矢，孝道備者。賜以秬鬯，以先後與施行之次。自不相逾，相爲本末。（漢・班固撰『白虎通義』巻下）

【作例】

「九錫圖」（明・程大約『程氏墨苑』巻二、萬暦二二～三七年［1594～1609］刊本）

「九錫」（大原民聲編、浅野思成筆『名数畫譜』地、文化六年［1809］序刊本）

きゅうしゅうのず　九秋圖

「九秋」とは、秋海棠、紫茉莉、秋葵、翦秋羅、洋菊、玉簪、金桂、紫木槿、紫雲花（江南での俗名は翠桃）という。また、秋山、枯樹、秋鏡、秋琴、秋蝶、秋塘、秋笛、秋燕、秋風という説もある。

【出典】

「題銭維城九秋圖」（清・乾隆皇帝『御製詩集』三集、巻七十六）

【作例】

「九秋圖」［秋山、枯樹、秋鏡、秋琴、秋蝶、秋塘、秋笛、秋燕、秋風］（『點石齋叢畫』、光緒一一年［1885］序、上海點石齋書局石印本）

「九秋圖」（大原民聲編、浅野思成筆『名数畫譜』地、文化六年［1809］序刊本）

きゅうじょしゅんえんのず　宮女春怨圖

→「春怨圖」

きゅうぜん　鳩禅

【作例】

「鳩禅」（橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』巻三、貞享四年［1687］刊本、文政一年［1818］再刊本）

きゅうせんぽうさくちょう　急先鋒索超

急先鋒索超は『水滸伝』の中の豪傑の一人である。「急先鋒」は彼の綽名である。索超はもと大名府の将校であったが、後に梁山泊に入った。

【出典】

梁中書看時，不是別人，卻是大名府留守司正牌軍索超。爲是他性急，撮鹽入火，爲國家面上，只要爭氣，當先廝殺，以此人都叫他做急先鋒。（百二十回本『水滸傳』第十三回）

【作例】

「急先鋒索超」（明・陳洪綬『水滸葉子』、天啓六年［1626］頃の刊本）

「索超」（清・陸謙繪『天罡地煞圖』不分巻、天保六年［1835］和刻本）

「急先鋒索超」（葛飾前北斎爲一筆『繪本水滸傳』、文政一二年［1829］

序、萬極堂梓）
「急先鋒索超」（仮名垣魯文標記、一雲斎国久畫『肖像水滸銘々傳』前編下、弘化五年［1848］不朽堂刻本）
「急先鋒索超」（泉龍亭是正編、月岡芳年筆『繡像水滸銘々傳』三編、大橋堂梓、小田原屋又七板）

きゅうせんぽう、とうかくにこうをあらそう
急先鋒、東郭争功

「急先鋒東郭争功」は、北京大名府留守司の留守梁中書が楊志を起用するために、東郭門にある練兵場で将校たちと試合させた。楊志がまず周瑾を負かして、次に索超と勝負がつかず引き分けることにより梁中書を喜ばせた。したがって、楊志が管軍提轄使に任命された。

【出典】

當時將臺上早把青旗磨動。楊志拍馬望南邊去。周謹縱馬趕來，將韁繩搭在馬鞍鞽上，左手拿著弓，右手搭上箭，拽得滿滿地，望楊志後心颼地一箭。楊志聽得背後弓弦響，霍地一閃，去鐙裏藏身，那枝箭早射箇空。周謹見一箭射不著，卻早慌了。再去壺中急取第二枝箭來，搭上弓弦，覷的楊志較親，望後心再射一箭。楊志聽得第二枝箭來，卻不去鐙裏藏身。那枝箭風也似來，楊志那時也取弓在手，用弓稍只一撥，那枝箭滴溜溜撥下草地裏去了。周謹見第二枝箭又射不著，心裏越慌。楊志的馬早跑到教場盡頭。霍地把馬一兜，那馬便轉身望正廳上走回來。周謹也把馬只一勒，那馬也跑回。就勢裏趕將來去。那綠茸茸芳草地上，八箇馬蹄翻盞撒鈸相似，勃溂溂地風團兒也似般走。周謹再取第三枝箭，搭在弓弦上，扣得滿滿地，儘平生氣力，眼睜睜地看著楊志後心窩上，只一箭射將來。楊志聽得弓弦響，扭回身，就鞍上把那枝箭只一綽，綽在手裏。便縱馬入演武廳前，撇下周謹的箭。梁中書見了大喜。傳下號令，卻叫楊志也射周謹三箭。將臺上又把青旗磨動。周謹撇了弓箭，拏了傍牌在手，拍馬望南而走。楊志在馬上把腰只一縱，略將脚一拍，那馬勃溂溂的便趕。楊志先把弓虛扯一扯，周謹在馬上聽得腦後弓弦響，扭轉身來，便把傍牌來迎，卻早接箇空。周謹尋思道，那廝只會使鎗，不會射箭。等我待他第三枝箭再虛詐時，我便喝住了他，便筭我贏了。周謹的馬早到教場的南盡頭。那馬便轉望演武廳來。楊志的馬見周謹馬跑轉來，那馬也便回身。楊志早去壺中掣出一枝箭來，搭在弓弦上。心裏想道，射中他後心窩，必至傷了他性命。他和我又沒冤仇。洒家只射他不致命處便了。左手如托太山，右手如抱嬰孩，弓開如滿月，箭去似流星。說時遲，那時快，一箭正中周謹左肩。周謹措手不及，翻身落馬。那疋空馬直跑過演武廳背後去了。衆軍卒自去救那周謹去了。［中略］梁中書隨卽喚楊志上廳問道，你與索超比試武藝如何。楊志稟道，恩相將令，安敢有違。［中略］二人得令，縱馬出陣，都到教場中心。兩馬相交，二般兵器並舉。索超忿怒，輪手中大斧，拍馬來戰楊志。楊志逞威，撚手中神鎗，來迎索超。兩箇在教場中間，將臺前面，二將相交，各賭平生本事。一來一往，一去一回，四條臂膊縱橫，八隻馬蹄撩亂。當下楊志和索超兩箇鬬到五十餘合，不分勝敗。月臺上梁中書看得呆了。兩邊衆軍官看了，喝彩不迭。（百二十回本『水滸傳』第十三回）

【作例】

「急先鋒東郭争功」（百回本『李卓吾先生批評忠義水滸傳』第十三回、萬暦三八年［1610］容與堂刊本）

きゅうちゅうちくさる　厩中畜猴

郭璞（276～324）が趙固将軍を訪ねた際、あいにく将軍の愛馬が亡くなったばかりである。そのため、将軍が客に会わない。郭璞は守衛に「私は死馬を生き返らせることができる。」と言った。守衛は早速中に入り将軍に報告した。将軍は慌てて出迎えて、その方法を教え

てもらい、部下たちに猿のようなものを捕まえに行かせた。連れてきた猿を死馬の前に置くと、猿が早速馬の鼻に近づき、吸い始めた。間もなく馬が生き返り、立ち上がって大声で鳴いた。将軍は大喜びをし、郭璞に手厚くもてなして、多額の金を与えた。

【出典】

惠懷之際，河東先擾。璞筮之。投策而嘆曰，嗟乎，黔黎將湮於異類，桑梓其翦爲龍荒乎。於是潛結姻昵及交遊數十家，欲避地東南。抵將軍趙固，會固所乘良馬死，固惜之，不接賓客。璞至，門吏不爲通。璞曰，吾能活馬。吏驚入白固。固趨出，曰，君能活吾馬乎。璞曰，得健夫二三十人，皆持長竿，東行三十里，有丘林社廟者，便以竿打拍，當得一物，宜急持歸。得此，馬活矣。固如其言，果得一物似猴，持歸。此物見死馬，便噓吸其鼻。頃之馬起，奮迅嘶鳴，食如常，不復見向物。固奇之，厚加資給。（唐・房玄齡等撰『晉書』巻七十二，列傳第四十二）

【作例】

「厩中畜猴」（橘有税『繪本故事談』巻七、正徳四年［1714］刊本）

きゅうていのず　九鼎圖

九鼎とは牛、羊、豕、魚、腊、腸胃、膚、鮮魚、鮮腊といった九つの鼎（かなえ）のことである。帝王の権威を象徴しているため、天子しか持てない。

【出典】

禹鑄九鼎，五者以應陽法，四者以象陰數。使工師以雌金爲陰鼎，以雄金爲陽鼎。鼎中常滿以占氣象之休否。當夏桀之世，鼎水忽沸。及周將末，九鼎咸震。皆應滅亡之兆。後世聖人，因禹之迹，代代鑄鼎焉。（秦・王嘉撰『拾遺記』巻二）

九鼎者，牛一，羊二，豕三，魚四，腊五，腸胃同鼎六，膚七，鮮魚八，鮮腊九。（宋・聶從義撰『三禮圖集注』巻十三）

【作例】

「九鼎圖」（明・程大約『程氏墨苑』巻八、萬暦二二～三七年［1594-1609］刊本）

「九鼎」（大原民聲編、浅野思成筆『名数畫譜』地、文化六年［1809］序刊本）

きゅうてんげんじょ　九天玄女

九天玄女は仙女である。百二十回本『水滸伝』の第四十二回に、九天玄女は宋江の夢の中に現れ、天書三巻を宋江に授けた。第八十八回に、宋江が遼を討伐した際、九天玄女は再び宋江の夢の中に現れ、遼の兀顔統軍の混天象陣を破るための秘策を宋江に授けた。

【出典】

頭綰九龍飛鳳髻，身穿金鏤絳綃衣。藍田玉帶曳長裾，白玉珪璋擎綵袖。臉如蓮萼，天然眉目映雲環。唇似櫻桃，自在規模端雪體。猶如王母宴蟠桃，卻似嫦娥居月殿。正大仙容描不就，威嚴形像畫難成。（百二十回本『水滸傳』第四十二回）

【作例】

「宋公明遇九天玄女」（百回本『李卓吾先生批評忠義水滸傳』、萬暦三八年［1610］容與堂刊本）

「玄女授天書」（百二十回本『忠義水滸全書』、明末刊本）

「九天玄女」（葛飾前北斎爲一筆『繪本水滸傳』、文政一二年［1829］序、萬極堂梓）

ぎゅうとうゆうぜんし　牛頭融禅師

牛頭山の法融禅師は、俗姓は韋といい、潤州延陵の人である。十九歳の頃、彼はすでに経・史に精通した。大部般若を読み、茅山に入り、

仏門に入った。後に牛頭山の幽棲寺に移り、住み着いた。唐の貞観（627～649）年間、四祖は彼を訪ね、法を伝授した。顕慶二年（657）に亡くなり、鶏籠山に埋葬された。

【出典】

牛頭山法融禪師者，潤州延陵人也。姓韋氏。年十九，學通經史。尋閱大部般若，曉達眞空。忽一日歎曰，儒道世典，非究竟法。般若正觀，出世舟航。遂隱茅山，投師落髮。後入牛頭山幽棲寺北巖之石室，有百鳥御花之異。唐貞觀中，四祖遙觀氣象，知彼山有奇異之人，乃躬自尋訪。［中略］唐永徽中，徒衆乏糧，師往丹陽緣化。去山八十里，躬負米一石八斗，朝往暮還，供僧三百，二時不闕。三年，邑宰蕭元善請於建初寺講大般若經，聽者雲集。至滅靜品，地爲之震動。［中略］顯慶元年，邑宰蕭元善請住建初，師辭不獲免，遂命入室上首智巖付囑法印，令以次傳授。將下山，謂衆曰，吾不復踐此山矣。時鳥獸哀號，踰月不止。庵前有四大桐樹，仲夏之月，忽自凋落。明年正月二十三日，不疾而逝。窆於雞籠山。（宋・普濟撰『五燈會元』巻二，四祖大醫禪師旁出法嗣）

【作例】

「牛頭融禪師」（橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』巻五、貞享四年［1687］刊本、文政一年［1818］再刊本）

「牛頭融禪師」（某岡之繪『繪圖の林』巻下、元禄二年［1689］刊本）

「牛頭融禪師」（法眼春卜雪静編『畫巧潛覽』巻四、元文五年［1740］刊本）

きゅうにらこく　鳩尼羅國

鳩尼羅国は仏牙石の原産地であるという。

【出典】

鳩尼羅國、此乃西番出佛牙石去處。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十三巻）

【作例】

「鳩尼羅國」（明・王圻、王思義『三才圖會』人物十三巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「鳩尼羅國」（橘有税畫圖『唐土訓蒙圖會』巻五、享保四年［1719］刊本）

ぎゅうばしろくじじょもみてこれもしる、りんはせいじんいいますのよにいづつねにみがたし、これしょうじゅなりとさとすづ　牛馬豕鹿児女も見て是も知る、麟は聖人在の世に出づ常に見難し、是祥獣也と諭す圖

唐の韓愈（退之）の「獲麟解」を図解する挿絵である。

【出典】

麟之爲靈昭昭也。詠於詩，書於春秋，雜出於傳記百家之書。雖婦人小子，皆知其爲祥也。然麟之爲物，不畜於家，不恒有於天下。其形也不類。非若馬牛犬豕豺狼麋鹿然。然則雖有麟，不可知其爲麟也。角者吾知其爲牛。鬣者吾知其爲馬。犬豕豺狼麋鹿，吾知其爲犬豕豺狼麋鹿。惟麟也不可知。不可知，則其謂之不祥也亦宜。雖然麟之出，必有聖人在乎位。麟爲聖人出也。聖人者必知麟。麟之果不爲不祥也。又曰，麟之所以爲麟者，以德不以形，若麟之出，不待聖人，則其謂之不祥也亦宜。（韓退之「獲麟解」，『古文眞寶後集』巻二）

【作例】

「牛馬豕鹿児女も見て是を知る、麟は聖人在の世に出づ常に見難し、是祥獣也と諭す圖」（有臺藤應著、旭輝齋畫『畫本古文眞寶後集』初編巻五、嘉永三年［1850］刊本）

きゅうはん　臼犯

臼犯（?～前622）は狐偃のことである。狐偃は咎犯、子犯、咎季、臼季ともいい、また司空季子ともいう。「臼犯」はもともとないが、おそらく日本語では「咎犯」と同じ発音であるため、使われたであろう。狐偃は晋の文公重耳の母親方の叔父であり、晋の大臣である。重耳は国外で政治避難して十九年、狐偃はいつもそばについていた。後に重耳が晋に戻り、即位してすなわち文公である。狐偃は重用され、晋の襄公六年に亡くなった。

【出典】

晉文公 重耳，晉獻公之子也。自少好士。年十七有賢士五人。曰，趙衰。狐偃咎犯，文公舅也。賈佗。先軫。魏武子。［中略］重耳遂奔狄。狄其母國也。是時重耳年四十三。從此五士。其餘不名者數十人。［略］重耳出亡凡十九歲而得入。時年六十二矣。晉人多附焉。文公元年春、秦送重耳至河。咎犯曰，臣從君周旋天下。過亦多矣。臣猶知之。況於君乎。請從此去矣。重耳曰。若反國、所不與子犯共者、河伯視之。乃投璧河中、以與子犯盟。（漢・司馬遷撰『史記』巻三十九，晉世家第九）

【作例】

「臼犯」（馬場信意『分類書本良材』巻二、正徳五年［1715］刊本）

きゅうびきとうそうおう　九尾亀陶宗旺

陶宗旺は『水滸伝』の中の一人の豪傑で、綽名は「九尾亀」という。後に梁山泊に入った。

【出典】

第四箇好漢姓陶名宗旺，祖貫是光州人氏，莊家田戶出身。貫使一把鐵鍬，有的是氣力，亦能使鎗輪刀，因此人都喚做九尾龜。（百二十回本『水滸傳』第四十一回）

【作例】

「陶宗旺」（清・陸謙畫『天罡地煞圖』不分巻、天保六年［1835］和刻本）

「九尾亀陶宗旺」（葛飾前北斎爲一筆『繪本水滸傳』、文政一二年［1829］序、萬極堂梓）

「九尾亀陶宗旺」（仮名垣魯文標記、一雲斎国久畫『繡像水滸銘々傳』後篇上、弘化五年［1848］刊本）

きゅうほうさんぼうのず　九峰三泖圖

九峰とは九つの山のことで、すなわち機山、鳳凰山、横雲山、佘山、細林山、崑山、干山、辭山、小横山である。三泖とは圓泖、大泖、長泖である。また陸機の『三泖冬暖夏涼図経』によると、三泖は大中小に分かれているという。泖とは茂という意味で、水に近いところである。

【出典】

機山在府城西北二十里，因郡人陸機得名。山下有村曰平原，亦以機爲平原內史故也。

鳳凰山在府城北二十三里，據九峯之首，延頸舒翼，宛若鳳翥。故名華亭，有九峯爲邑之勝，此其一也。

橫雲山在府城西北二十三里，一名橫山。或云，因陸機弟雲易今名。山頂有白龍洞，潛通澱湖，深不可測。

佘山在府城北二十五里，舊傳有姓佘者，養道於此，因名。東西二峯延亙數里，招提蘭若隱見其中，土宜茶，有泉，名洗心，甚清冽。

細林山在府城西北二十五里，舊名神山。唐天寶間改今名。

崑山在府城西北二十五里，陸氏之先葬此。後生機、雲時，人比之崑山出玉，因以名山。

干山在府城北二十九里，舊傳吳干將鑄劍於此，因名。又以形如天馬，亦名天馬山，山南舊有圓智寺。
鞏山在府城北四十里，舊以土宜竹箭而名。下有駱駝墩，干將試劍石。又有玉竇泉，雨華洞。山形雖小，而遊覽者衆。
小横山在横雲山東，由絶頂至東北，皆峯巒隱起，壁立數仞。色盡赭，遊人呼爲小赤壁。盡壁斬，然一罅如虎丘試劍石狀，前有石可踞坐，下瞰小澗，亦九峯奇絶處也。
三泖在府城西南三十六里。太史公云泖之爲言茂也。晉陸機對武帝三泖冬溫夏涼圖經，泖有上中下之名。而舊縣圖又以近山涇，圓者曰圓泖，近泖橋，闊者曰大泖。自泖而上，縈繞百餘里者，曰長泖。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理七卷）

【作例】
「雲間九峰」「三泖圖」（明・王圻、王思義『三才圖會』地理七卷、萬暦三七年［1609］刊本）
「九峰三泖圖」（『名山圖』、崇禎六年［1633］墨繪斎刊本）
「九峰三泖」（大原民聲編、浅野思成筆『名数畫譜』地、文化六年［1809］序刊本）
→「三泖」

きゅうぼく　休穆

【作例】
「休穆」（橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』巻三、貞享四年［1687］刊本、文政一年［1818］再刊本）

きゅうもんりゅうししん　九紋龍史進

九紋龍史進は『水滸伝』の豪傑の一人である。体に九匹の龍の刺青があるため、「九紋龍」という綽名を得た。後に少華山の盗賊神機軍師朱武、跳澗虎陳達、白花蛇楊春との往来が告発され、追われる身になった。紆余曲折の末、梁山泊に入った。

【出典】
太公道，教頭在上，老漢祖居在這華陰縣界，前面便是少華山。這村便喚作史家村。村中總有三四百家，都姓史。老漢的兒子，從小不務農業，只愛刺鎗使棒。母親說他不得，嘔氣死了。老漢只得隨他性子。不知使了多少錢財，投師傅教他。又請高手匠人，與他刺了這身花繡，肩臂胸膛，總有九條龍，滿縣人口順，都叫他做九紋龍史進。（百二十回本『水滸傳』第二回）

【作例】
「九紋龍史進」（明・陳洪綬『水滸葉子』、天啓六年［1626］刊本）
「九紋龍史進」（前北斎爲一老人畫『新編水滸畫傳』、文政一一年［1828］刻本）
「九紋龍史進」（高井蘭山翁撰、葛飾前北爲一翁畫圖『繪本孝経』、天保五年［1834］序、嘉永二年［1849］刊本、元治一年［1864］再刻）
「九紋龍史進」（仮名垣魯文標記、一雲斎国久畫『肖像水滸銘々傳』前編上、弘化五年［1848］不朽堂刻本）
「九紋龍史進」（柳水亭種清著、葵岡北渓畫『水滸畫傳』、安政三年［1856］序、甘泉堂板）
「九紋龍史進」（泉龍亭是正編、月岡芳年筆『繡像水滸銘々傳』三編、大橋堂梓、小田原屋又七板）

きゅうもんりゅうしかそんをさわがす　九紋龍鬧史家村

九紋龍史進は少華山の盗賊の首領朱武、楊春、陳達を招待し、史家村にある自宅で飲酒しているところ、狩猟の李吉の密告によって兵隊に包囲された。そこで史進が家に火を放ち、三人の首領と家来たちと

一緒に包囲網を突破して少華山に逃亡した。

【出典】

史進下梯子，來到廳前，先叫王四，帶進後園，把來一刀殺了。喝教許多莊客，把莊裡有的沒的細軟等物，即便收拾，盡教打疊起了，一壁點起三四十個火把。莊裡史進和三個頭領，全身披掛，槍架上各人跨了腰刀，拏了朴刀，拽扎起，把莊後草屋點着。莊客各自打拴了包裹。外面見裡面火起，都奔來後面看。且說史進就堂中又放起火來，大開了莊門，納聲喊，殺將出來。史進當頭，朱武、楊春在中、陳達在後，和小嘍囉並莊客，一衝一撞，指東殺西。史進卻是個大蟲，哪裡攔擋得住。（百二十回本『水滸傳』第三回）

【作例】

「九紋龍大鬧史家村」（百回本『李卓吾先生批評忠義水滸傳』第二回、明万暦三八年［1610］容與堂刊本）

「九紋龍鬧史家村」（鳥山石燕豊房筆『水滸畫潜覧』巻上、安永六年［1777］刊本）

きゅうよくのず　九罭圖

罭とは穴の小さい網のことで、小魚を獲る魚網である。『詩経』に周公を賛美する「九罭」という詩がある。

【出典】

緩罟謂之九罭。九罭，魚網也。注，今之百囊罟，是亦謂之罶。今江東謂之緩。（晉・郭璞注、宋・邢昺疏『爾雅注疏』巻四）

【作例】

「九罭圖」（明程大約《程氏墨苑》巻十、萬暦二二～三七年［1594～1609］刊本）

「九罭之魚」（『點石齋叢畫』）、光緒一一年［1885］序、上海點石齋書局石印本）

「九罭」（大原民聲編、浅野思成筆『名数畫譜』地、文化六年［1809］序刊本）

きゅうらんせいらん　仇覧棲鸞

後漢の仇覧は、字は季智といい、また名は香といい、陳留の考城の人である。仇は蒲の亭長を務めた間、人々に農業に従事するよう勧める。農業の仕事が終わると、子弟たちに勉強するよう勧める。考城令の王渙が彼の名声を聞き、主簿に抜擢した。しかしながら、仇は出世するつもりがなく、「鷹のような高飛びの志より鸞のような木に棲む生き方の方がいい」と言った。結局、王渙は仇の意見を尊重し、学資を与え、太学で勉強させることにした。

【出典】

後漢仇覽字季智，一名香，陳留考城人。爲蒲亭長，勸人生業。農畢乃令子弟就學，剽輕游恣者，皆役以田桑。賑卹窮寡，朞年大化。初到，有陳元者，獨與母居。而母詣覽告元不孝。覽親到元家，與其母子飲。因爲陳人倫孝行，譬以禍福之言。元卒擬古成孝子。鄉邑爲之諺曰，父母何在，在我庭。化我鳲梟哺所生。時考城令王渙政尚嚴猛。聞覽以德化人，署爲主簿，謂曰，主簿聞陳元之過，不罪而化之。得無少鷹鸇之志邪。覽曰，以爲鷹鸇，不若鸞鳳。渙謝遣曰，枳棘非鸞鳳所棲。百里豈大賢之路。以奉資，勉入大學。學畢歸鄉里。州郡並請，皆以疾辭。（唐・李瀚撰、宋・徐子光注『蒙求集注』巻下）

【作例】

「仇覧棲鸞」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』二編巻六、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

きゅうり（きゅうり）　胡瓜

胡瓜は漢の張騫が西域から種を持ち帰っきたため、胡瓜と呼ぶわけ

であると伝えられている。また黄瓜ともいう。一説は北方の人が胡人の石勒を避けるために、胡瓜を黄瓜に改称した。もう一説は胡瓜が黄色いため、黄瓜を呼ぶという。

【出典】

［藏器曰］北人避石勒諱，改呼黄瓜，至今因之。［時珍曰］張騫使西域得種，故名胡瓜。案杜寶拾遺錄云，隋大業四年避諱，改胡瓜爲黄瓜。與陳氏之說微異。今俗以月令王瓜生卽此，誤矣。王瓜，土瓜也，見草部。（明・李時珍撰『本草綱目』巻二十八，菜部）

胡瓜黄色，亦謂之黄瓜。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』草木十巻）

【作例】

「瓜」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』草木十巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「胡瓜」（鮮斎永濯繪『萬物雛形畫譜』四編、明治一二年［1879］刊本）

ぎゅうろうしょくじょ　牛郎織女

→「董永」、「七夕」

【作例】

「織女」（清・王翬繪『百美新詠』圖傳一百、嘉慶年間［1796～1820］刊本）

「烏鵲搭橋」（『點石齋叢畫』、光緒一一年［1885］序、上海點石齋書局石印本）

「織女」（『呉友如畫寶』第二集下・古今百女圖、中国古畫譜集成第二十一巻、山東美術出版社、2000年）

「牛郎織女」（橘宗重著、長谷川等雲畫『繪本寶鑑』、貞享四年［1687］刊本、文政一年［1818］再刊本）

きゅうろうのず　九老圖

→「至道九老圖」

【作例】

「九老圖」［季昉、李運、宋琪、魏丕、朱昂、張好問、武允成、僧贊寧、陽徽之］（文鳳山人［文鳳駿聲］『文鳳畫譜』三編、、文化八年［1811］刊）

「九老圖」［狩野孝信筆］（法眼春卜一翁『和漢名畫苑』五巻、寛延二年［1749］序刊本）

きょう　鴞

朱子によると、鴞は悪鳥である。鳥の子を取って食べる。伝えることによると、鴞が鳴くと人が死ぬという。

【出典】

朱子文公云，鴟鴞，惡鳥，攫鳥子而食者也。俗說鴞鳴則人死。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』鳥獸一巻）

【作例】

「鴟鴞」（明・王圻、王思義『三才圖會』鳥獸一巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「鴞」（葛飾戴斗畫『花鳥畫傳』、嘉永二年［1849］叙刊本）

ぎょう　堯

堯は古代の伝説の帝王である。

【出典】

帝堯者，放勳。其仁如天，其知如神。就之如日，望之如雲。富而不驕，貴而不舒。黄收純衣，彤車乘白馬，能明馴德，以親九族。九族既睦，便章百姓。百姓昭明，合和萬國。（漢・司馬遷撰『史記』巻一，

六〇

五帝本紀第一）

【作例】

「帝堯」（明・天然撰『歴代古人像賛』、弘治一一年［1498］刊本）

「帝堯陶唐氏」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物一巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「堯」（林守篤編述『畫筌』巻四、正徳二年［1712］序、享保六年［1721］刊本）

↓「堯王」、「帝堯」、「陶唐氏」

ぎょうおう　堯王

↓「堯」

【作例】

「堯王」［狩野眞説筆］（法眼春卜一翁『和漢名畫苑』四巻、寛延二年［1749］序刊本）